発掘調査報告

凡例

一、国分市内の縄文・弥生・古墳・歴史時代遺跡の発掘調査の中から、主なものを取り上げた。

一、発掘調査は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（姶良町）が主体となって実施したものと、国分市教育委員会が埋蔵文化財センターの指導・協力のもとに実施したものとがある。

一、遺跡からの出土品は、埋蔵文化財センターと国分市郷土館に保管・展示されている。

一　国分市の遺跡

私たちの住む国分市は、鹿児島県のほぼ中央に位置し、東は福山町、西は隼人町、北は霧島町・財部町と境界を接し、南は鹿児島湾（錦江湾）に面している。県都鹿児島市から約三〇㌔の距離にあり、鹿児島国際空港から約一〇㌔、約二〇分の至近距離にある。交通路は国道一〇号線、二二〇号線、ＪＲ日豊本線が市内を通り、さらに近くには九州縦貫自動車道が走る交通の要衝となっている。

市内の地勢は、低地（平野）、台地、山地の三区分に大別され、中部、東部一帯に広がるシラス台地及び丘陵地と、西部に広がる沖積平野及び海岸干拓地から形成されている。このうち、低地部の国分平野は、山間から発する天降川、手籠川、検校川等の河川が土砂を運搬堆積し形成した三角洲性沖積平野で、北部は霧島火山群が連なり、東部は高隈山系に接している。

高隈山系は日本外帯山系に属し、鹿児島湾奥地溝のため生じた傾動ブロックであり、主に中世層からなっている。一部安山岩もみられるが、かなりの標高まで（二五〇㍍から三五〇㍍）熔結凝灰岩、シラス、火山灰等に覆われている。これは、姶良カルデラから噴出した入戸火砕流（別名シラス）によるもので、シラスの堆積した台地が多いのは国分市を含め鹿児島湾北一帯に共通した特徴で、本市では北部、東部にかけて国分市全体面積の約七〇㌫を占めている。シラスは細砂粒子が多いため透水性が顕著で乾燥時は安定しているが、降雨時には軟弱になり、流水作用を受け、浸食・崩壊等が絶えない。

国分平野に分布する未固結堆積物は、洪積世、沖積世のもので、河川の流水作用を受け中州状の丘陵地や河岸段丘を形成している。堆積物は、山間部から発する河川が土砂を運搬したもので、軽石及び火山ガラスが多量に混在し、軟弱な地質を形成している。

遺跡の分布も、地形に呼応するように点在しており、とくに沖積平野（国分平野）からカルデラ（シラス）台地にかけての山麓付近と平野に面するカルデラ台地上に集中している。

旧石器時代の遺跡としては、昭和四十九年（一九七四）から五十三年にかけて、隣接する溝辺台地（カルデラ台地）で行われた九州縦貫道路の発掘調査において

二、三の旧石器時代の遺跡が発見されており、城山山頂遺跡や上野原遺跡から黒曜石の細片が出土しているので、今後国分市周縁部の段丘傾斜地や平野に延びる舌状台地上において遺跡が発見される可能性がでてきている。

縄文時代の遺跡としては、最近の発掘調査によって縄文時代早期・後期・晩期の遺跡が発見されている。とくに縄文時代早期の平栫貝塚・上野原遺跡については後述するが、その外にも後期・晩期の遺跡として鍛冶屋馬場遺跡・妻山元遺跡・矢祢前遺跡・大野原遺跡・志明寺遺跡・口輪野遺跡などがあり、今後の調査によってさらに詳細なことが分かってくると思われる。

弥生時代の遺跡としては、最近まで発見されていなかったが、上野原遺跡の調査によって弥生時代の土器片及び住居跡が発見された。また、国分高校から住居跡及び破砕鏡などが発見されており、今後の発掘調査によって、他の時代に比べて著しく少なかった弥生時代の遺跡もさらに発見されるだろう。

古墳時代の遺跡としては、国分市全域から成川式土器が出土している。とくに、沖積平野（国分平野）からカルデラ（シラス）台地にかけての山麓付近と平野に面するカルデラ台地上に集中しており、矢祢前遺跡・上野原遺跡・城山山頂遺跡・妻山元遺跡・内野々遺跡など多数点在している。一方、国分地域では高塚式古墳は一基も発見されていない。しかし、府中にある亀の甲遺跡は昭和二十八年、向花小学校校舎工事に際し、地下式土壙と思われる遺構が発見され、多数の副葬品が出土した。とくに金銅製三累環柄頭附直刀は特記すべき遺物であり、遺構を含め、今後さらに調査が必要になろう。

歴史時代の遺跡としては、大隅国府・国分寺が置かれた地域でもあり、また歴史の古い神社・寺院址も多く、当然多くの遺跡が予想される。歴史時代の遺跡は、弥生・古墳時代の社会・文化の基盤の上に成立し、しかも後世にも影響力をもったものであるから、当然重層関係で発見される可能性が強い。とくに、国分は大隅国の中心地であったことから、近年大隅国分寺に関係する遺跡については発掘調査を通じてある程度の成果を得たが、まだまだ寺域、伽藍配置等の詳細については不明のままである。また、大隅国府（国衙）跡や大隅国分尼寺跡については不明のままであり、今後の調査が期待される。

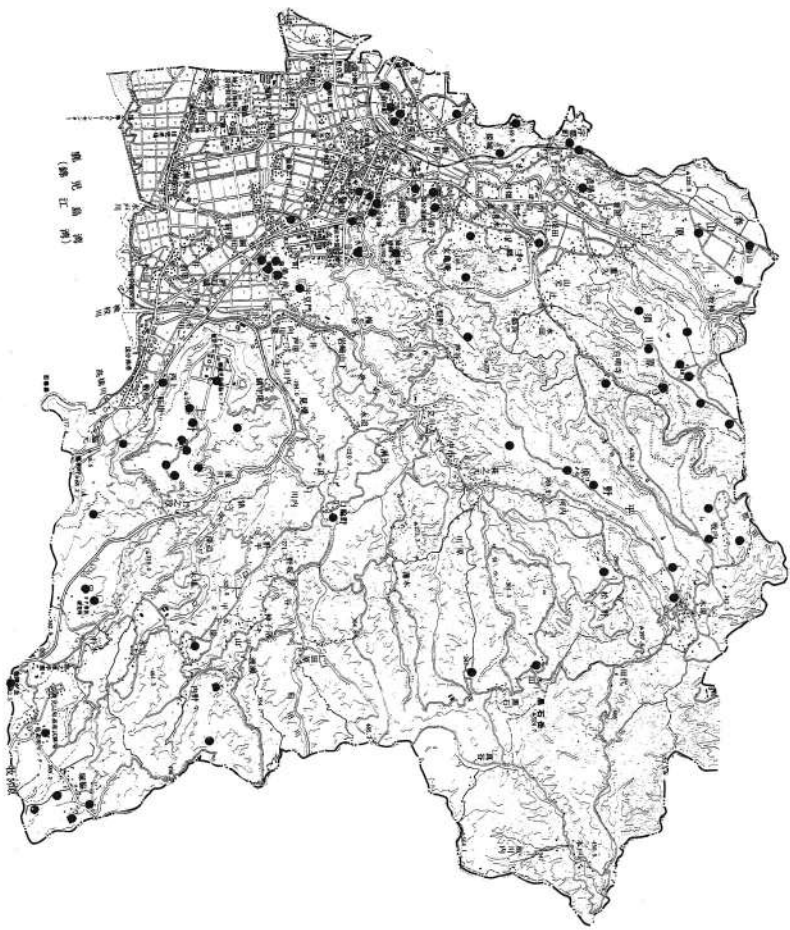


図1　埋蔵文化財包蔵地位置図①

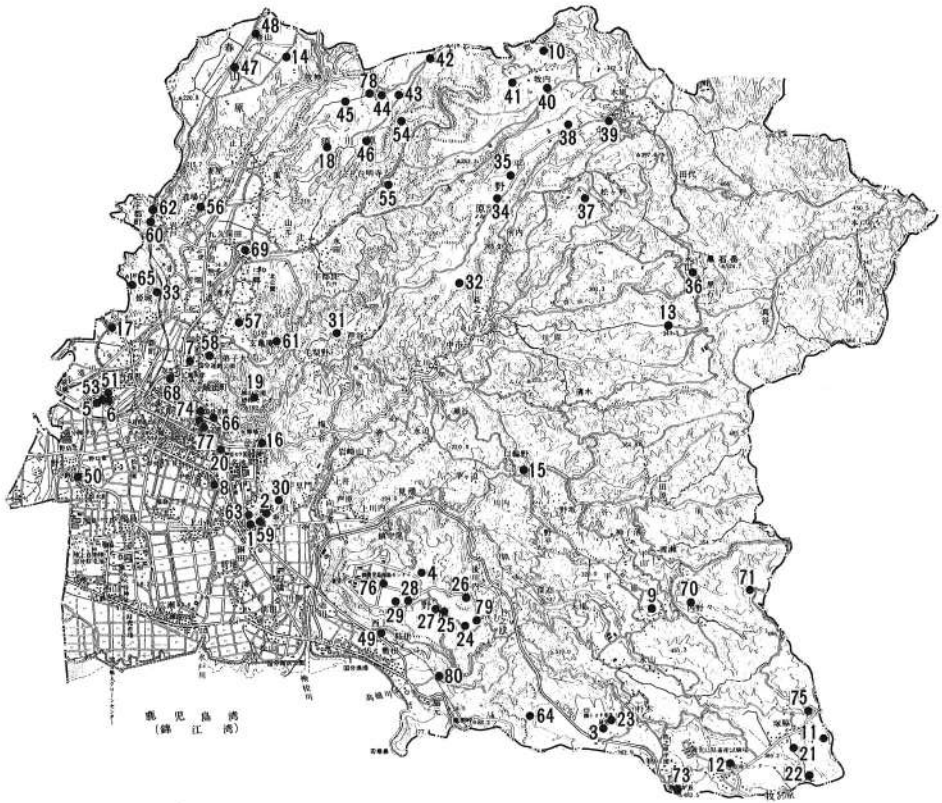


図２　埋蔵文化財包蔵地位置図②

表1　国分市埋蔵文化財包蔵地一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
10—1	平桝	上井201	山麓	縄—前	平桝式	昭46・47発掘調査
2	中囲貝塚	上井一条	〃	縄—早	土器・押型式・石器・人骨	
3	椎屋原	上之段椎屋原	畑地	縄—後		
4	鍋迫	上之段鍋迫	台地	縄・古	土器・成川式	
5	気色の杜	府中町	小台地	弥	土器・石斧・祭器	
6	岡見山	府中町	台地	弥・歴	土器・瓦	
7	智尾岡	清水弟子丸乳尾	平地	弥—後	土器	勾玉出土(清水村史)
8	園田	上小川園田	〃	〃	〃	
9	平下原	平山平之原	台地	弥	土器・高杯・石斧	
10	浮塚	郡田浮石	〃	弥前・後	土器・石斧	
11	塚脇A	上之段塚脇	山林	縄・弥	土器	
12	塚脇B	県種畜場飼料場	台地	弥	〃	
13	大野原	川原黒石大野原	〃	〃	土器・磨製石斧	
14	志明寺	重久春山原志明寺	〃	〃	土器	
15	口輪野	川原口輪野	山麓	〃		
16	大平	上小川大平	〃	〃		
17	こがの杜	姫城木ケ森	畑地	弥・歴		
18	立山原	重久立山原	〃	弥		
19	城山山頂	上小川新城	山頂	縄・古	吉田式・土師器（布留式）須恵器	昭52・53発掘調査
20	妻山元	中央2—2819	山麓	〃	黒川式・成川式・須恵器・住居跡	昭59発掘調査
21	竹渡A	上之段竹渡	畑地	古	土師器・成川式・須恵器	
22	竹渡B	上之段竹渡	〃	〃	〃	
23	堂ケ原	上之段堂ケ原	〃	〃	成川式	
24	藤ケ尾	上之段藤ケ尾	〃	〃	成川式・土師器	
25	後川内	上之段後川内	〃	〃	〃	
26	東原A	川内東原	〃	〃	〃	
27	中原	上の段中原	〃	〃	〃	
28	水ケ迫	上之段水ケ迫	〃	〃	〃	
29	堂ケ尾	川内堂ケ尾	〃	〃	成川式	
30	桶脇	上井桶脇	山麓	〃	成川式・土師器	
31	白蔵原A	川原白蔵原	畑地	〃	〃	
32	鷹原	川原鷹原	山麓	〃	成川式	
33	竹下	姫城竹下	畑地	古・歴	土師器	
34	下外戸	姫城下外戸	〃	古	成川式	
35	中平野	上郡田中平野	〃	〃	〃	
36	星合原	川原星合原	〃	〃	〃	
37	茅落	上郡田茅落	〃	〃	〃	
38	甚ケ原	上郡田甚ケ原	〃	〃	成川式・土師器	
39	前畑	上郡田前畑	〃	〃	成川式・土師器・青磁・磨石	
40	外戸前	上郡田外戸前	〃	〃	成川式	

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
10—41	猿喰	上郡田猿喰	畑地	古	成川式	
42	牧神	重久牧神	〃	〃	成川式・土師器	
43	新開込	重久新開込	〃	〃	成川式	
44	桃ヶ迫A	重久桃ヶ迫	〃	〃	成川式・土師器	
45	星熊原	重久星熊原	〃	〃	〃	
46	白蔵原B	川原白蔵原	〃	〃	〃	
47	内野々	重久内野々	〃	縄・古	土器・成川式・須恵器	
48	大久保	重久大久保	〃	古	成川式・土師器・黒曜石	
49	大王坂	敷根大王坂	〃	古・歴	土師器・青磁	
50	弥勒寺	野口弥勒寺	〃	古	成川式	
51	亀ノ甲	府中町	〃	〃	土師器・須恵器・金環	
53	大隅国府跡	府中町	〃	歴	瓦	
54	旧台明寺	台明寺柿迫	山麓	〃	層塔・五輪塔・板碑・磨崖仏	
55	台明寺	台明寺紙田	段丘・水田	〃	歴代住僧碑	
56	念仏寺	重久道場口	山麓	〃	五輪塔・方柱塔袈	
57	遠寿寺	中央1—19	〃	〃	島津家墓地	
58	清水寺	清水中宇都	〃	〃	連碑	
59	渕竜院	上井宇都	〃	〃		
60	吉祥院	重久剣之宇都	〃	〃	十三仏・宝篋印塔	
61	清水城跡	清水外城	山岳	中世	禿倉・通路	
62	橘木城跡	重久吉永	〃	〃	骨壺・経筒・禿倉・墓	東襲山村史の地誌
63	上井城跡	上井一条	〃	〃		国分諸古記地誌
64	敷根城跡	敷根(長尾城)	〃	〃		
65	姫城城跡	姫城城山	〃	〃		
66	国分屋形跡	上小川鐘突	山麓	〃	石垣（舞鶴城）	国分小学校敷地
67	忠将屋形跡	清水外城	〃	〃	屋形跡	
68	鼻連山城跡	中央1—10	丘陵	〃	龍昌寺跡・六地蔵塔	旧記雑録・国分諸古記
69	郡田小城跡	郡田小城	〃	〃		旧記雑録
70	渡瀬ノ陣地跡	川内渡瀬	山頂	〃	空堀	三国名勝図絵
71	桂姫城跡	上之段尾谷	山谷	不明		〃
72	高松城跡	郡田高松	山頂	〃		〃
73	惣陣が丘	上之段塚脇	〃	中世		
74	大隅国分寺跡	中央1—1794	平地	歴	瓦・層塔・自然形塔姿	昭56発掘調査
75	塚脇C	上之段塚脇	台地	縄・古	土器・成川式	
76	上野原テクノ	上之段上野原	〃	縄・弥	土器・住居跡	
77	大隅国分寺跡	中央1—1749	平地	歴	瓦・土師器・須恵器	昭62・63発掘調査
78	桃ヶ迫B	重久桃ヶ迫	畑地	古	成川式・土師器	
79	東原B	上之段東原	〃	〃	〃	
80	敷根火薬製造所跡	敷根彦田	山麓	近代	用水路・水車跡	

二　国分市内の各遺跡

1　平栫（ひらかこい）遺跡

国分市上井に所在する縄文時代早期後半の平栫式土器を標式とする遺跡である。平栫遺跡は、国分市街地の東南部で、沖積平野に延びた丘陵の末端部の南斜面に立地し、標高二〇㍍の段々畑に位置する。平栫遺跡は貝殻が採集されていたことから平栫貝塚と呼ばれていたが、貝塚の根拠が無いことから、現在は平栫遺跡と呼ばれるようになっている。

昭和四十六年（一九七一）の六月と八月の二回、河口貞徳氏が発掘調査を行った。四十七年の報告によると、地層は三層に分かれ、吉田式土器、前平式土器、押型文土器、変形撚糸文土器、平栫式土器、塞ノ神式土器などの土器が層序を保って出土したとされている。そして、平栫式土器をⅠ式、Ⅱ式の二型式に、塞ノ神式土器をAa式、Ab式、Bc式、Bd式の四型式に分類している。そのほか、サメ歯製の耳飾りが出土している。

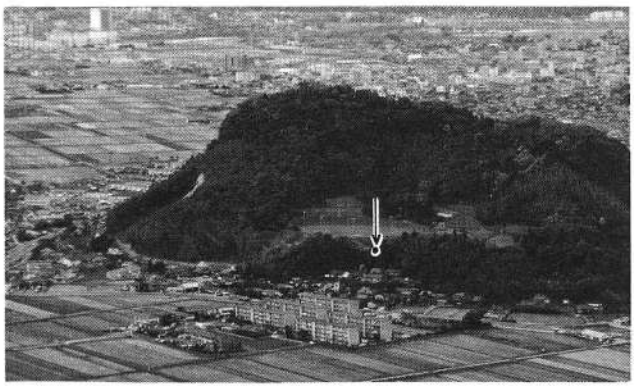
標式となった平栫式土器は、最初はⅠ式とⅡ式に分けられた。Ⅰ式の特徴は、円筒形の胴部にラッパ状に開いた口縁部のつく平底の土器である。文様は、胴部に刻線による幾何学を施すタイプである。Ⅱ式は、胴部はわずかに張り頸部はしまり、口縁部はラッパ状に開く上げ底気味の器形を呈する。文様は、口縁部にはヘラ描沈線による幾何学文や連点文や刻目凸帯文を描き、胴部には結節縄文を施すタイプである。しかし、平栫Ⅰ式土器は他に出土例がみられず、平栫Ⅱ式土器が広く出土しているところから、平栫Ⅱ式土器のみを平栫式土器と呼ぶようになっている。

この平栫式土器は、南九州を代表する早期後半の土器型式である。そして平栫式土器は、鹿児島県や宮崎県・熊本県の南部、すなわち南九州にその分布の中心がみられるが、九州島全域からも点々と出土し、遠く島根県や岡山県からも出土例が報告されている。

さらに最近、平栫式土器に深鉢形土器とともに壺形土器が存在することが判明してきた。壺形土器は、胴部を張り出させた後、すぼませながら細口の口縁にいたる徳利状の器形の土器である。口縁部は粘土紐を貼って肥厚させている。肥厚させた口縁から頸部付近には深鉢形土器同様の文様を施文している。また、同じ器形的な特徴

をもった無文の壺形土器もみられる。

【引用文献】
「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号　一九七二　河口貞徳
「縄文早期の壺形土器」『南九州縄文通信』No.4　一九九一
新東晃一



縄文時代早期の平栫遺跡（矢印）

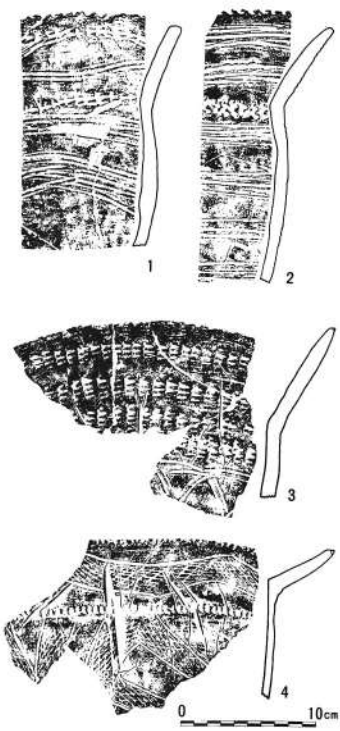


図3　縄文時代早期後葉の土器（平栫遺跡）河口1972

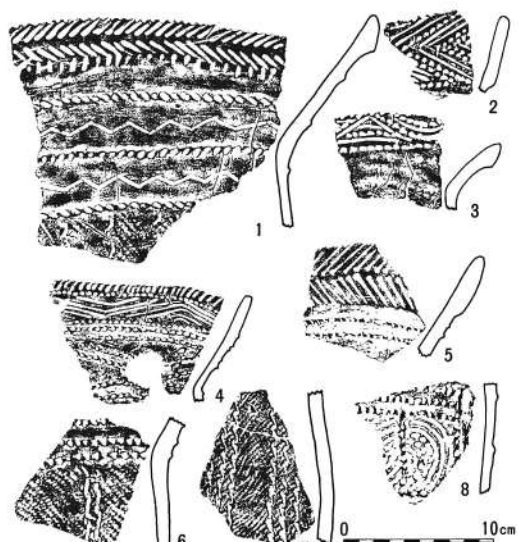


図4　縄文時代早期後葉の土器（平栫遺跡出土）河口1972

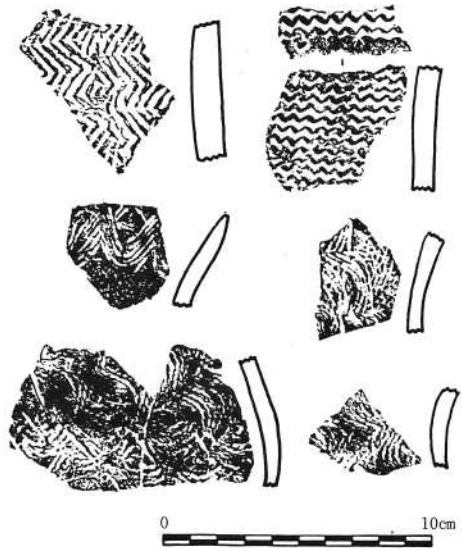


図5　縄文時代早期中葉の土器
（平栫遺跡出土）

2　上野原遺跡

上野原遺跡は、国分市上之段堂ケ尾に所在する。遺跡は、市街地の東南部に位置し、鹿児島湾奥の姶良カルデラの火口壁に続く標高約二六〇㍍の台地上に立地する。遺跡の立地する台地一帯は、通称上野原台地と呼ばれている。およそこの台地一帯は、縄文時代早期から歴史時代にかけての遺跡が連綿と続いている。

台地の南は鹿児島湾に接し、北と西を検校川の支流の鎮守尾川が走り深い谷を形成し、独立丘陵状を呈している。遺跡は、姶良カルデラの火口壁に添うように立地し、前面に桜島、背後に霧島連峰が連なり、穏やかな鹿児島湾と広大な国分平野が眼下に眺望できるすばらしい景観と環境に恵まれている。

鹿児島県は、この台地の約八六㌶を『国分上野原テクノパーク』として、先端技術産業等の内陸工業団地を造成し、企業誘致が行われている。

昭和五十九年（一九八四）、県文化課は、造成に先立ち本地域の遺跡分布調査を実施したが、遺跡の確認にはいたらなかった。その後、六十一年に一工区の造成中に遺跡が発見されたため、同年十一月に一工区の発掘調査（一工区）と四工区の確認調査を行った。引き続き、平成三年（一九九一）には三工区の確認調査を実施し、縄文時代早期から歴史時代にかけての遺跡が確認された。協議の結果、三工区については平成四年から六年の三か年にわたって発掘調査を実施し、多大の成果を得てすでに終了している。四工区については平成七年から八年の二か年にかけて発掘調査を実施している。

発掘調査の成果は、一工区、三工区、四工区とも時代及び文化ともそれぞれ異なった特徴を示している。

一工区は、弥生時代の中期末に該当する竪穴住居跡五軒と掘立柱建物跡二棟が発見されている。これらの遺構は、東西に並んだ二棟の掘立柱建物跡を北から西、南に囲むように五軒の竪穴住居跡が配置されている。

五軒の竪穴住居跡は、直径約三㍍から六㍍の大きさの平面プランの住居跡で、基本的には中央部が一段深く、周囲に花弁状のベッド状遺構を備えたいわゆる花弁形住居跡と呼ばれるタイプである。この期の住居跡は隣接する平成八年度調査中の四工区でも検出されており、Ⅰ工区の弥生時代中期末から後期初頭の集落はかなり広い範囲に広がることが考えられる。

二工区は、縄文時代早期・前期・後期・晩期、弥生時代中期、古墳時代、平安時代等各期の遺構や遺物が発見されているが、遺跡の中心は早期後半の平栫式土器の時期であり、質・量とも群を抜いている。また、縄文時代早期の遺構は、集石遺構が約二〇〇基検出され注目された。縄文時代後期には、約九〇基の落とし穴が発見されている。さらに、弥生時代と古墳時代の竪穴住居跡が各一軒、平安時代の掘立柱建物跡が五棟発見されている。

最近、南九州の注目される縄文時代早期の出土遺物に壺形土器があるが、本遺跡では数多く出土している。なかでも平成六年度に、対で埋納された状態で出土した壺形土器は注目されている。さらに、縄文時代早期の多数の土製耳飾りの出土は注目されている。そのほか、土偶、用途不明の土製品、小型土器、環状石斧、多数の異形石器等の祭祀的な色彩の遺物が多数出土している。とくに、土製耳飾りは縄文時代後期から晩期の遺物であり、南九州の縄文時代早期文化の早熟ぶりが注目されている。

南九州では縄文時代草創期の調査が相次ぎ、他の地域に先駆けて定住社会が形成されたことが裏付けられているが、上野原遺跡の調査によって、次の縄文時代早期にはすでに安定した社会が形成され、高度な精神文化が発達していたことを窺い知ることができる。

【参考文献】

「鹿児島県上野原遺跡」『日本考古学年報』三九、一九八八
長野真
「鹿児島県上野原遺跡」『日本考古学年報』四六、一九九五
中村耕治

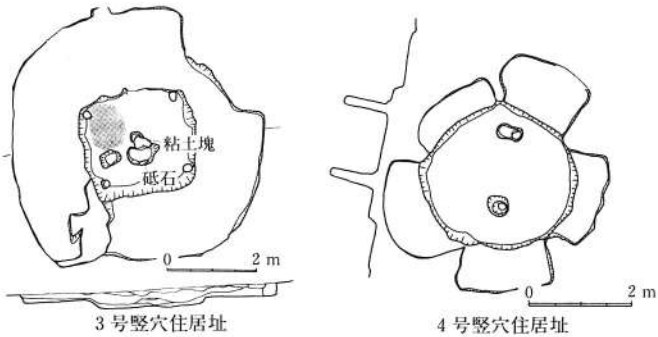


図 6　弥生時代の住居跡（上野原遺跡）

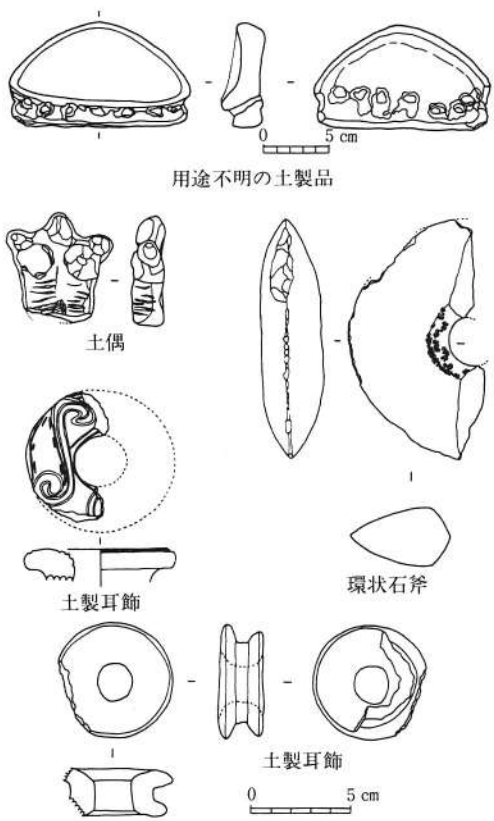


図 7　縄文時代の特殊な遺物（上野原遺跡出土）

3 本御内遺跡

本御内遺跡は、国分市中央二丁目の鹿児島県立国分高等学校敷地内に所在する。本遺跡は、国分市街地北側の城山山麓の標高約一〇メートルに位置し、慶長九年（一六〇四）に完成した「舞鶴城跡」の一角とその周囲の「衆中屋敷」にあたる。遺跡は、城山山麓の沖積面に遺構、遺物包含層は存在している。

本御内遺跡は、平成四年（一九九二）、五年、六年、八年の四次にわたる発掘調査が行われている。発掘調査は、いずれも鹿児島県立埋蔵文化財センターによって実施されている。

一次（平成四年）と二次（五年）の調査は、市道建設部分と国分高等学校体育館建設に伴う発掘調査である。発掘調査の結果、弥生時代から近世までの複合遺跡であることが判明した。

弥生時代は、比較的に小範囲ではあるが、重要な遺構や遺物が出土している。まず、注目されるものに、「方格T字鏡」の破砕鏡がある。「方格T字鏡」は、復元径約七センチメートルで、外帯に三角鋸歯文を巡らせ、内区にT字を刻すものである。鏡は破砕され、ペンダント（破砕鏡）として転用されている。破砕鏡の周辺からは大分県を中心とする「安国寺式土器」も出土し、破砕鏡との関連も注目されている。つまり、破砕鏡は中・四国地方や東九州に出土例が多く、安国寺式土器とともにこの地に持ちこまれたことが想定されている。さらに、隣接して二本柱の竪穴式住居跡も発見されている。

古墳時代では、成川式土器の包含層が検出され、大量の甕形土器や壺形土器、鉢形土器、手捏ね土器（ミニチュア）が出土している。

古代の遺構は、中世の大溝と重なってその下の埋土中から、縄目瓦や布目瓦を出土する断面がV字状の溝が検出されている。なかには、唐草文を施した軒平瓦も含まれている。

中世の遺構は、多数の水田跡とそれに伴う畦畔及び溝跡が確認されている。特に東西に走る幅約一・五メートルの大溝は、国分寺域内で発見されるV字溝と同じ方向であり、その関連が注目されている。出土遺物には、輸入陶磁器の青磁や白磁の他、土師器の坏や皿類が多数出土している。

近世の遺構では、舞鶴城館南面の大手門に通じるとい

われる「八間道」の東側石垣が確認されている。出土遺物には、近世の鬼瓦や有田焼・薩摩焼など大量に出土している。

平成六年及び八年以降の調査は、校舎建築やプール等の建設に伴った発掘調査が継続されている。近世の溝状遺構や土坑等の遺構に伴って弥生土器や古墳時代の土器（成川式土器）や古代瓦等の古い時期のものが出土している。いずれも部分的な発掘調査で調査面積や出土量も少ないため、今のところ明確な成果は得られていないが、今後の調査とその集大成によって全貌が明らかにされるであろう。

4　城山山頂遺跡

城山山頂遺跡は、国分市上小川字新城にあり、国分平野の東端中央部に突出した標高一九二・六㍍の山塊の頂上平坦部に位置し、大隅国の中枢部であった国分平野を一望の下に見渡すことができる天然の要害上に立地した遺跡である。

この城山は、慶長九年（一六〇四）島津家第十六代義久が築城した舞鶴城（現在国分小学校敷地）の背後にあり、城の裏山のように理解されがちであるが、麓の舞鶴城は居館であり、城山は非常時の詰め城にあたり、全山が堅固な山城である。

この地は、幕末の薩摩藩の地誌『三国名勝図会』及び明治初年の地誌「薩隅日地理纂考」には隼人城と記してある。

さらに『三国名勝図会』には、隼人城は「大隅隼人の故城址」とか、あるいは「曽君（そのきみ）の州廨（クニヤシロ）」との記事があり、この伝承が「宇佐八幡託宣集」記載の隼人の七隈、すなわち奴久良・幸原・神野・牛屎・志加牟・曽於乃石城（そおのいわき）・比売之城（ひめのき）のうちの曽於乃石城に比定する根拠のひとつになっていた。

国分市は、都市計画法に基づき、昭和四十九年（一九七四）度から都市公園建設事業を起こし、五か年計画で一三・四㌶の城山公園の建設を進めた。当該事業区は周知の遺跡であることを研究者から指摘され、国分市は工事を全面的に中断して鹿児島県教育委員会と協議し、遺跡の範囲確認及び発掘調査による若干の設計変更など、文化財保護と都市公園建設との調整を行い、事業計画の年度ごとに事前調査を実施した。調査は、昭和五十一年から五十三年にわたって調査を実施した。

調査の結果、第一次調査では、一見したところ山頂の平坦部全域にブルドーザーが入り、包含層を破壊して土器片を散乱させたような様相を呈していたが、土器片の散乱は山頂への進入路建設に際して包蔵地の一部が切断され、その土地が山頂全域にばらまかれた結果と分かった。

山頂の盛土は平均〇・六㍍、極端なところでは二・二㍍の厚さで、短期間のトレンチによる調査のみでは旧地表面を完全におさえることは不可能であった。各トレンチにおいて奈良・平安時代の土師器片・須恵器片の出土がみられたが、ほとんどが耕作その他で攪乱されていた。Ⅲ層上部からは古墳時代の土師器・成川式土器を主体とする遺物包含層が残存しており、しかも完形品が密集していて住居址の存在を推定できた。縄文時代前期の前平式土器片が包蔵されていることを確認した。

第二次調査では、住居址群と数多くのピット群を検出した。平面的な落ち込みプランの検出面では四基とみなされた住居址も掘り下げてみると九基の複合住居址となる状態であり、住居址の切り合い関係が本来の基盤層の残存部も少なく、住居址の数を完全にとらえるのは無理と判断し、住居址群の存在を確認した段階でとどめた。掘り下げを進めた住居址のうち七基は住居址の埋土内に多くの布留式土器片・成川式土器を残していた。五世紀初めごろのものとみられる布留式土器の出土例は本県では初調査であり、好資料を得ることができた。また、柱穴とみられるピットが一五二個検出された。

第三次調査では、第一次・第二次の確認調査において、五世紀代とみられる古い土師器を伴う住居址群を確認した。これらの土師器は、畿内・北九州に連なるものと考えられる。今回はこれと時期的にほぼ並行する在地の成川式土器を伴う住居址四三基（四三竪穴一、方形竪穴四二）を検出した。数多くの切り合い関係がみられる複合遺構で、しかも山城築城時に切り落とされ、完全なものは残存していない。

海岸平野にきつ立する山地上の集落は、軍事的性格をもった高地性集落と考えざるをえず、五世紀代における大和朝廷の勢力浸透をその時代的背景として考えなければ理解できないものである。また、径〇・八㍍から十㍍、深さ約〇・六㍍の円形の掘りこみが住居址群のそばで三個検出され、炭化米が多く出土した。

発掘調査の成果として、早い時期の遺物としては、縄文時代早・前期の前平式土器・吉田式土器の小破片の散布が見られたが、遺構を見出すことはできなかった。主たる遺物は、五世紀初めごろのもの、八世紀初めごろのもの、十六世紀中ごろのものの三時期に分けられ、遺物の量も五世紀初めごろのものと八世紀初めごろのものが多い。

遺構は五世紀初めごろの竪穴住居址群と八世紀か十六世紀のものか時期不明の小さな掘立柱の柱穴群が検出された。遺跡の立地、遺物・遺構から考えて、五世紀初めごろの高地性集落、八世紀初めごろの軍事的拠点、十六世紀中ごろの山城の存在が認められる。

五世紀初めごろの高地性集落は、その中に介在した畿内の布留式土器の出土を併せて考えると、五世紀初めごろに南九州に軍事的な緊張が展開されたことを示すものとみられ、これは記紀にいういわゆる〝クマソ征討〟にあてはまるものと考えてよいであろう。八世紀初めごろについては、大隅国守陽侯史麻呂殺害という大事件に伴う〝隼人の反乱〟と関連づけて考える以外にない。

宇佐八幡託宣集にみえる隼人七城のうち、最後まで隼人たちが抵抗した拠点、すなわち曽於乃石城が、この城山であったとみてよいであろう。その理由は、周囲を眺めた場合、昔の曽於郡の中での立地条件から考えると、石城の名を与えてよい場所は城山以外に見いだすことができないからである。

【参考文献】

「城山山頂遺跡」　一九八五　国分市教育委員会

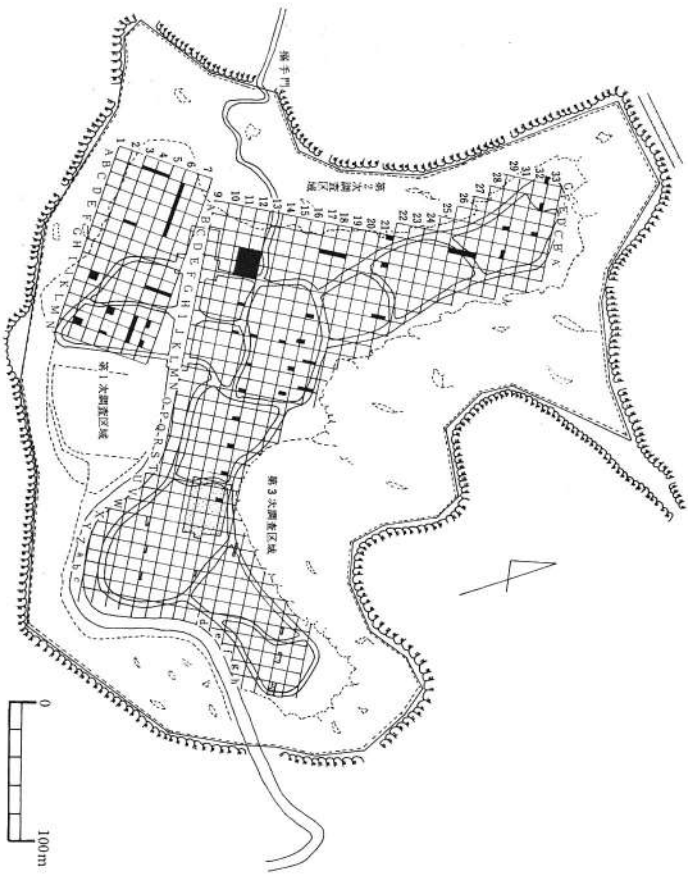


図8　城山山頂遺跡トレンチ配置図

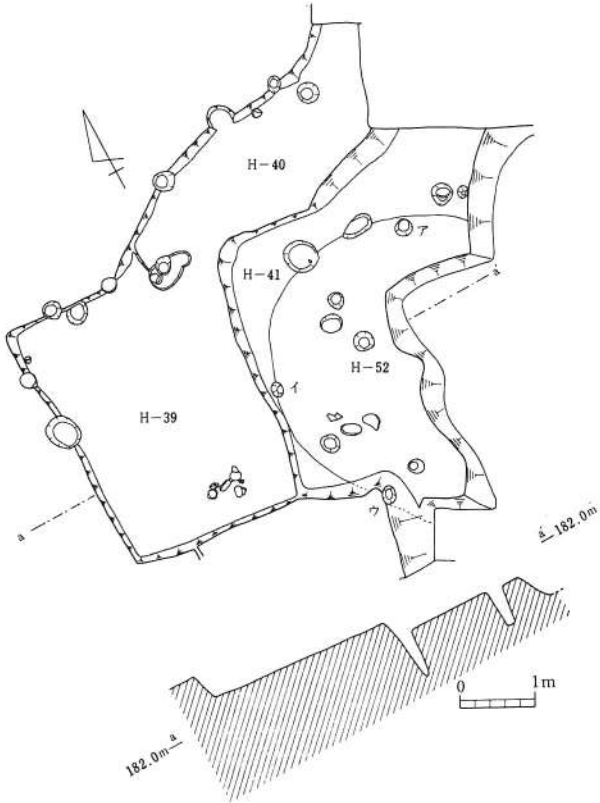


図9　月形住居址と方形住居址の複合

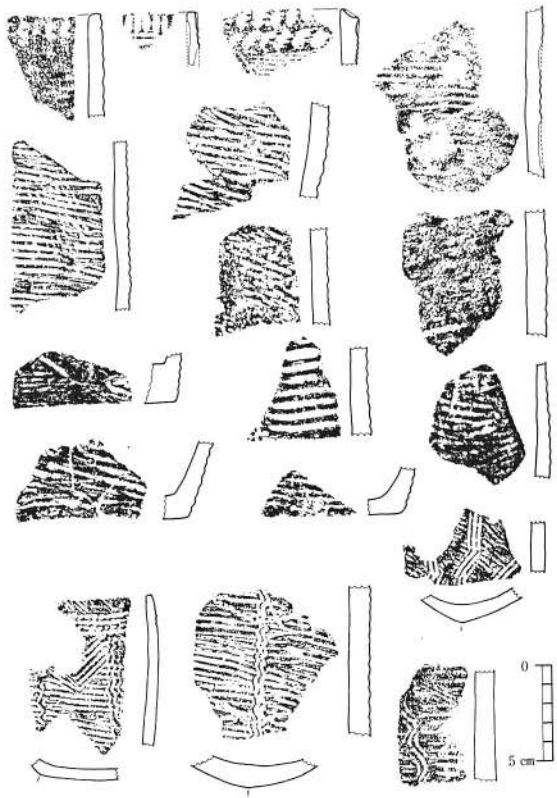


図10　縄文土器第1類土器

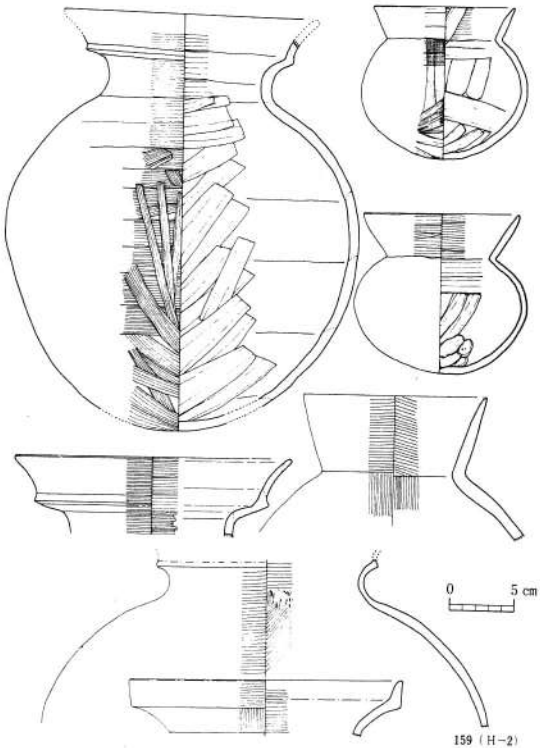


図11　土師器（壺）

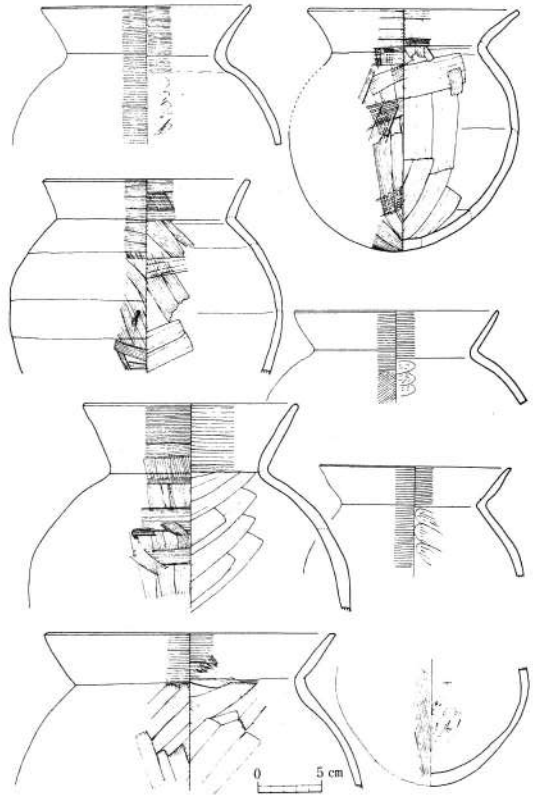


図12　土　師　器

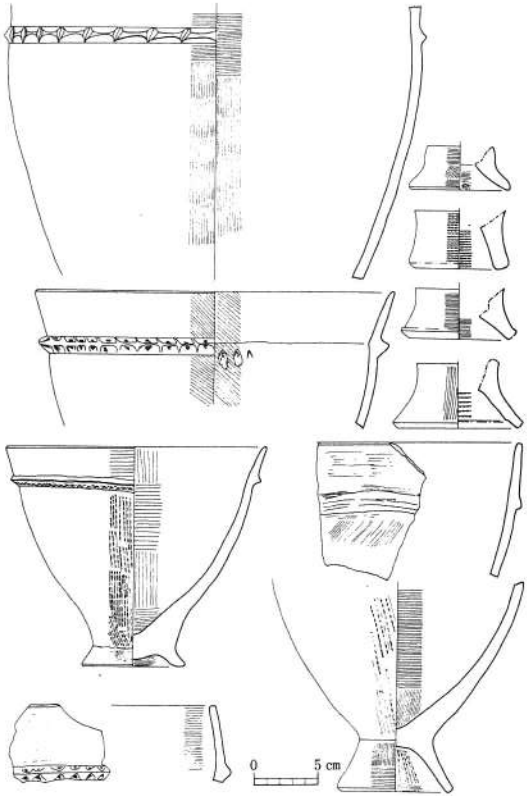


図13　成川式土器（甕）

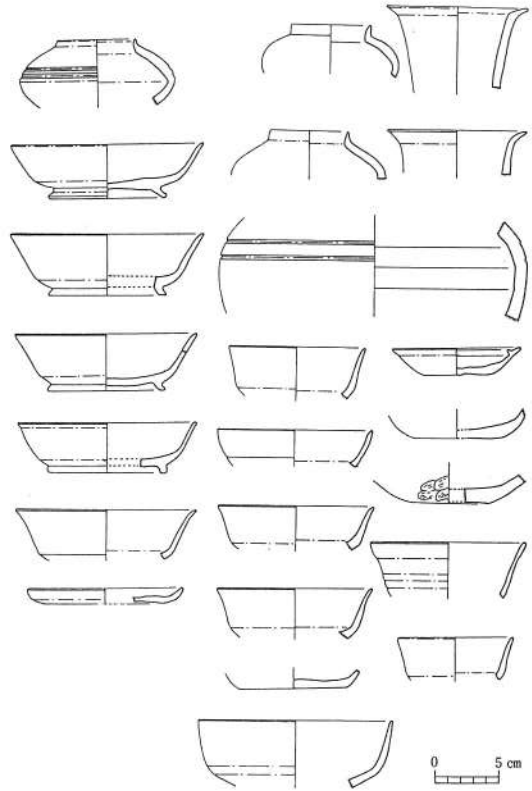


図14　須恵器（平瓶、小壺、坏）

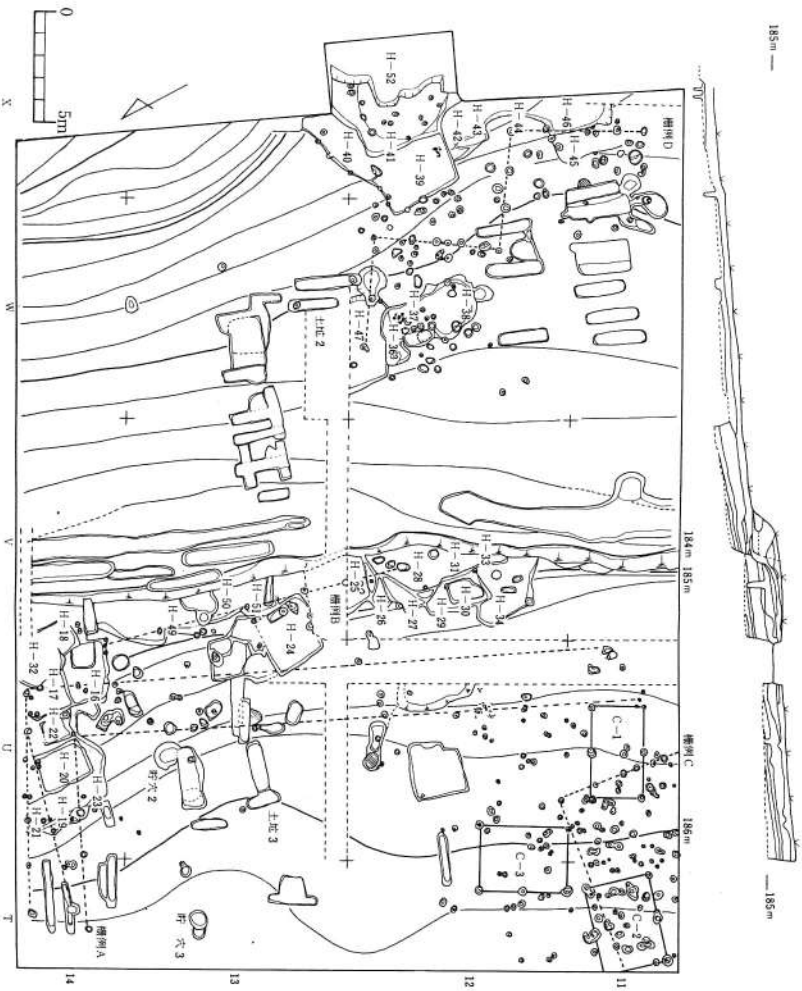


図15　U—X—11—14区の住居址群及び山城の柵列

5　妻山元遺跡

妻山元遺跡は、国分市中央二丁目の旧大隅線金剛寺駅跡の東側に位置する。遺跡地は、国分市街地の東北側に位置し、後背地に姶良カルデラ壁の独立丘陵状の通称城山（隼人城）を控え、南側は鹿児島湾に面した沖積平野へと広がる標高一二㍍から一〇㍍の微高地上にある。本遺跡は、遺跡名の「妻山元」からも分かるように、市街地の外れの位置（端っこ又はツマ）にあり、城山への登り口にある。

また、本遺跡は大隅国分寺跡に関係する布目瓦が出土する分布地域内に位置し、地形からも沖積平野で形成された傾斜地にあり、現在の街並みからも分かるように、古い時期から居住区として利用されてきた場所でもある。本遺跡地は江戸時代初めに舞鶴城（隼人新城）を築城した際、舞鶴城に合わせて区割りを敷いたため、それまでの大隅国分寺や大隅国府を基調とした街並みから一変している。このため、江戸時代以前の街並みを分かりにくくしている。

国分市教育委員会は、国分市中央二丁目地内における市営夕日ヶ丘団地敷地造成工事の最中に現場より土器片出土の連絡を受けた。ただちに、鹿児島県教育庁文化課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、指導を受けた。昭和五十九年（一九八四）七月から県文化課の協力を得て確認調査を実施した。調査の結果、古墳時代後期の成川式土器・住居址等の遺物・遺構が確認され、本調査を同年九月から本調査を実施した。

調査の結果、縄文時代晩期（黒川式土器）の遺物等が出土した。遺物は細片であるが磨滅されておらず、接合もⅠ区画を中心にみられる。遺物の垂直分布の傾斜に沿って出土し、安定している。ただ、一部では傾斜が強くなるために遺物の上下がでてくる。

土器については、深鉢形土器片、なかでも粗製土器が多く出土しセット関係を示す明瞭な遺物の出土はなかった。石器については、晩期にみられる打製石斧や磨製石斧・剝片石器が出土している。なかでも安山岩を石材とする石皿状の石器は、表面が平坦に研磨されている。縄文後期などに出土する石皿とは形状が異なる平坦面がどのような工程を経て研磨され、どのような目的に使用されたかは不明である。

また、古墳時代後期（笹貫式土器）の竪穴住居一三基

・土壙一三基・溝状遺構七基が検出された。検出された遺構については、攪乱や二次堆積層により良好な状態とはいえなかった。しかし、土壙二では、古墳時代初頭に位置づけられる土器がセットで検出されている。甕形・壺形土器は南九州における弥生時代後半の様式を引き続けている。在地系土器文化と外来系の要素が加わった高坏も出土している。また、住居址の床面から、製鉄遺構が二箇所検出され、精錬鍛冶炉にみられる椀形滓が出土している。

図16　妻山元遺跡周辺地形図

【参考文献】
「妻山元遺跡」　一九八九　国分市教育委員会

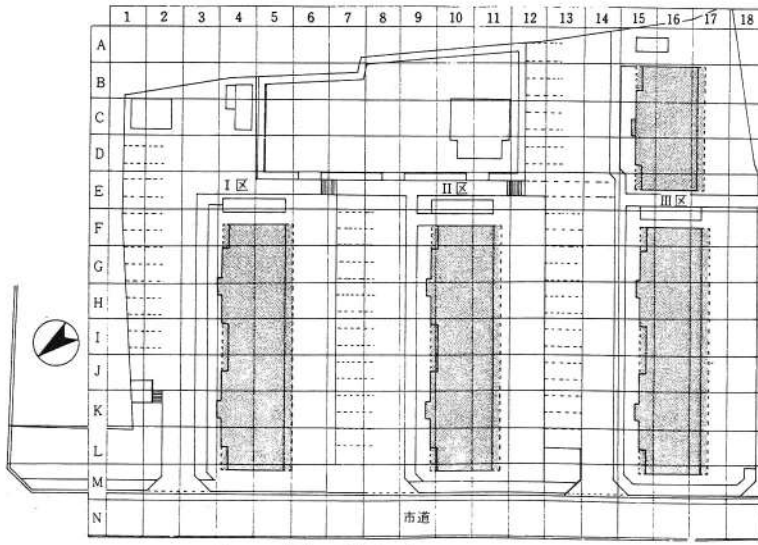


図17　妻山元遺跡グリッド配置図

第5図は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の土層柱状図である。各層については下記に説明を述べる。

Ⅰ層　灰褐色砂層……旧表土層で，東側に一部確認された。

Ⅱ層　黒褐色砂礫層……やや粘質を帯び，多量の砂礫を含む。

Ⅲ層　茶褐色粘質土層……含水率が高く，軽石や凝灰岩・安山灰等の礫を含む。
Ⅲ層に成川式土器片を少量含む。

Ⅳ層　黒茶褐色粘質土層……文化層－含水率が高く，Ⅳ層下部は粘質が強い。軽石・凝灰岩・安山岩等の礫を多量に含む。
Ⅳ層中位に地区により，約10cmの厚さで黄褐色パミス層が含込してくる。

Ⅴ層　黄茶褐色砂礫層
砂や礫の互層で，地区によって堆積が異なる。

Ⅵ層　明黒褐色粘質土層…文化層…約20m－25mの堆積で，含水率は高い。Ⅱ区では，縄文時代晩期の遺物が出土している。多量の砂礫を含む。

Ⅶ層　明茶褐色砂礫層…褐色の砂層や礫の互層で堆積の様相はⅤ層に類似する。

Ⅷ層　黄褐色粘質土層

Ⅸ層　黄褐色砂礫層

Ⅹ層　明褐色砂礫層

Ⅺ層　明茶色粘質土層

Ⅻ層　灰褐色砂層

Ⅶ層からⅫ層までは，砂や礫の互層を形成する。

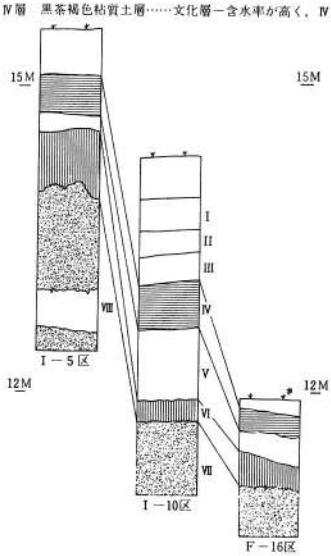


図18　妻山元遺跡土層柱状図

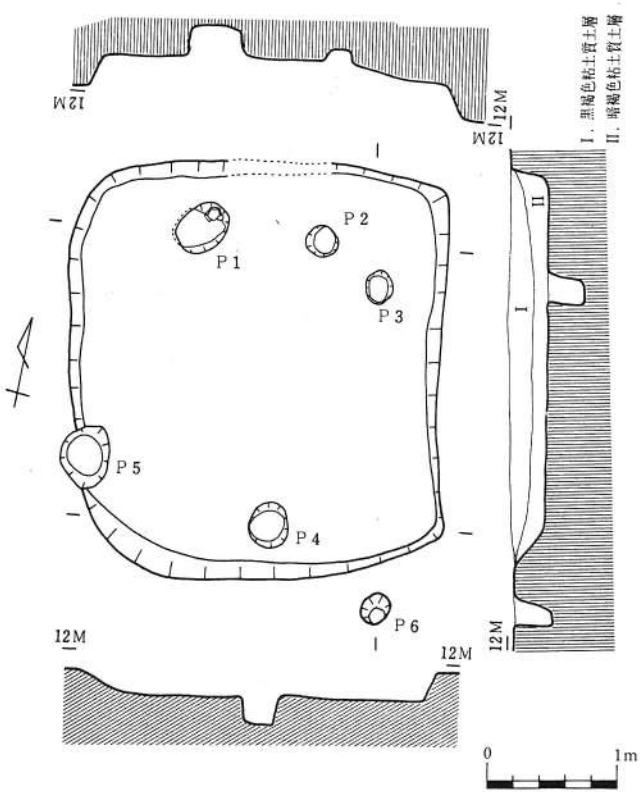


図19　平面・断面実測図（ＳＢ—01）竪穴住居跡

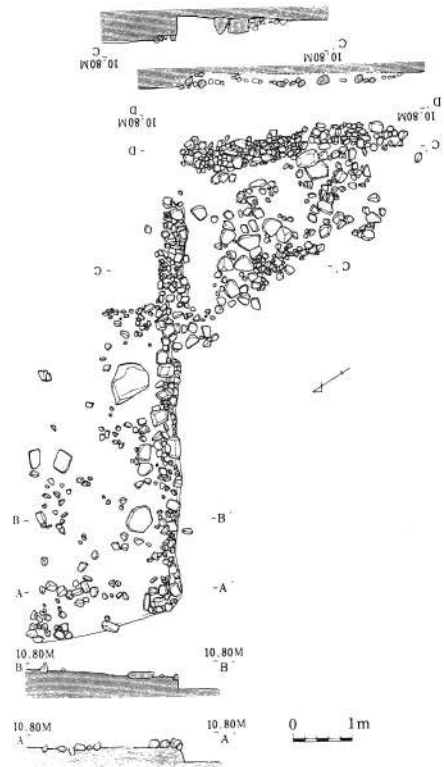


図20　平面・断面実測図（ＳＸ—03）

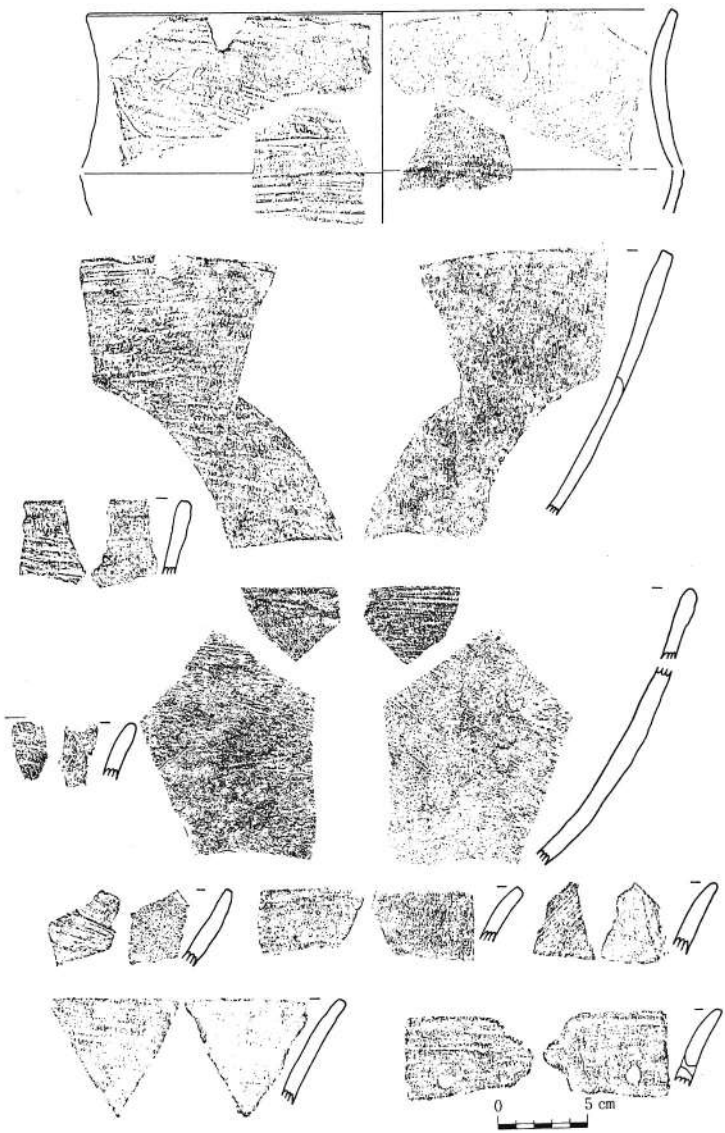


図21　II区出土縄文土器実測図

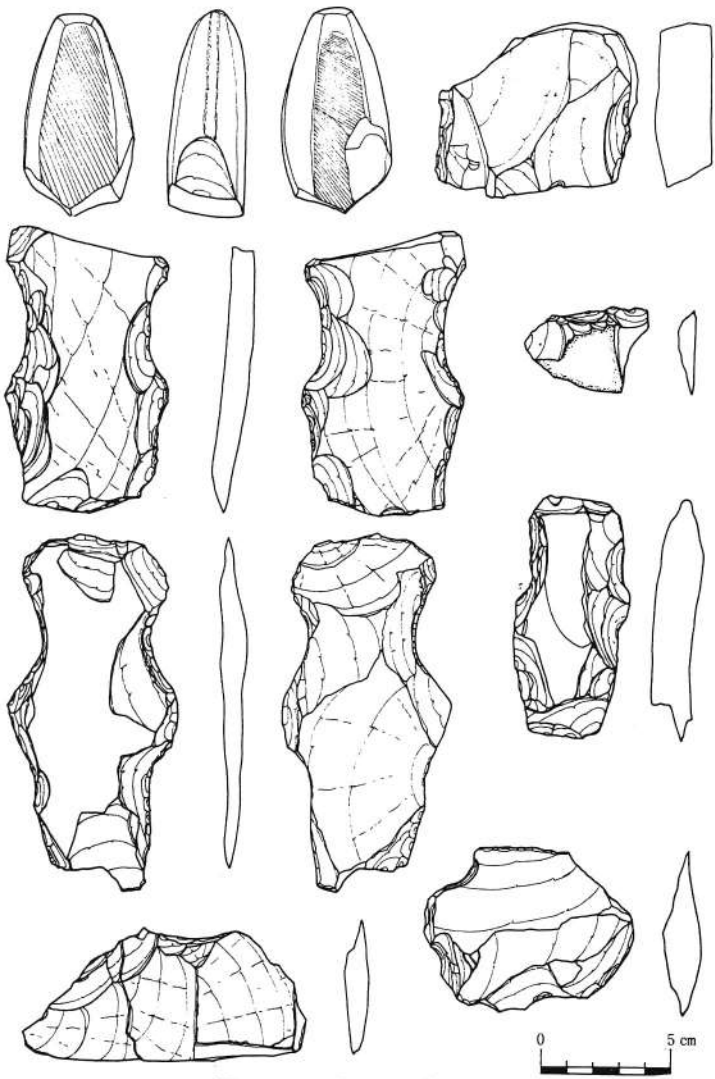


図22　II区出土石器実測図

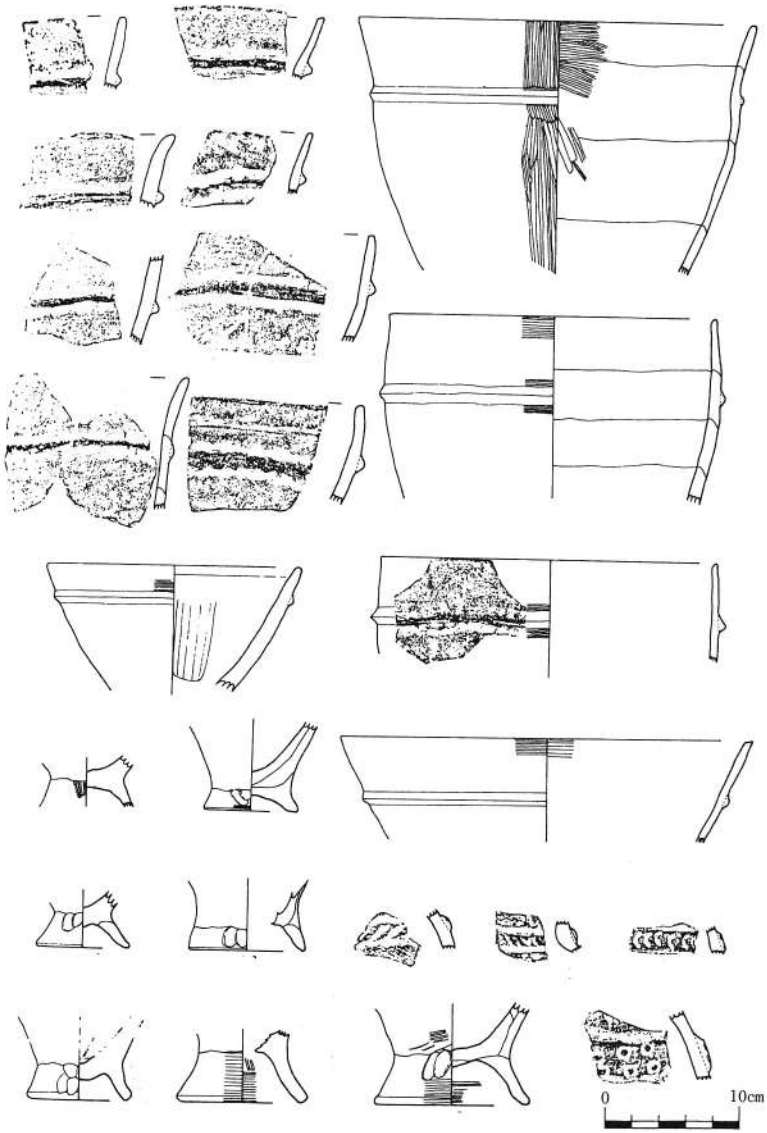


図23　出土土器実測図（ＳＢ―04）

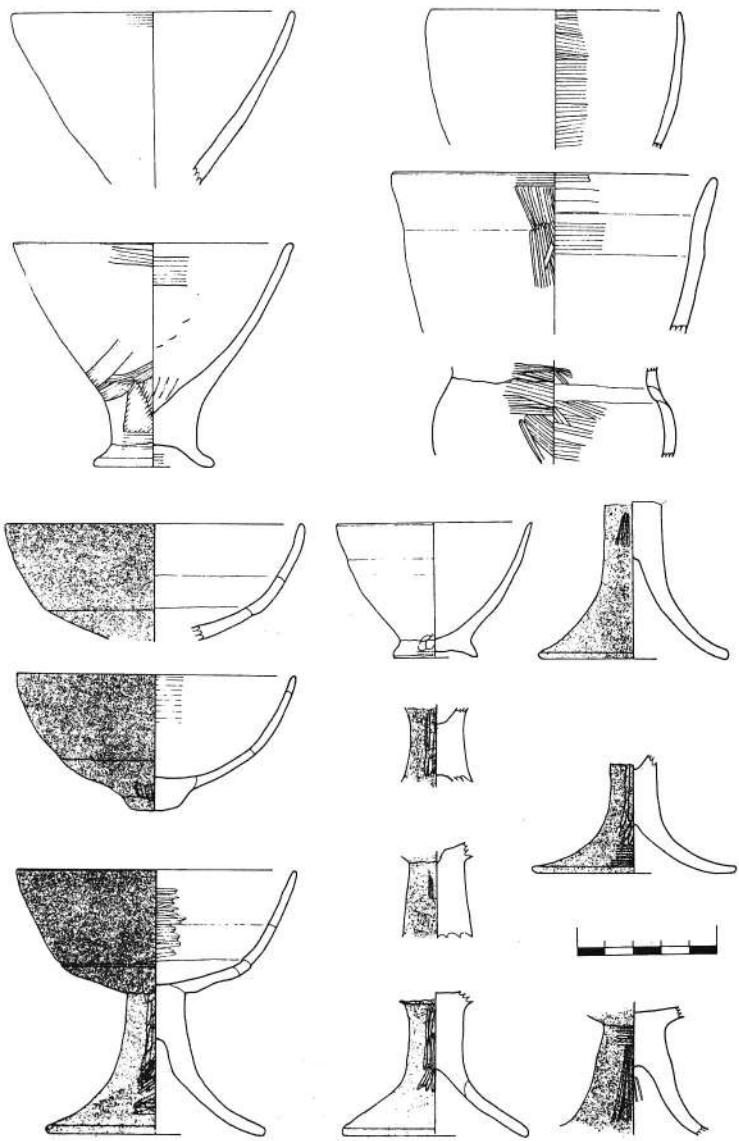


図24　出土土器実測図（ＳＢ―012）竪穴住居跡

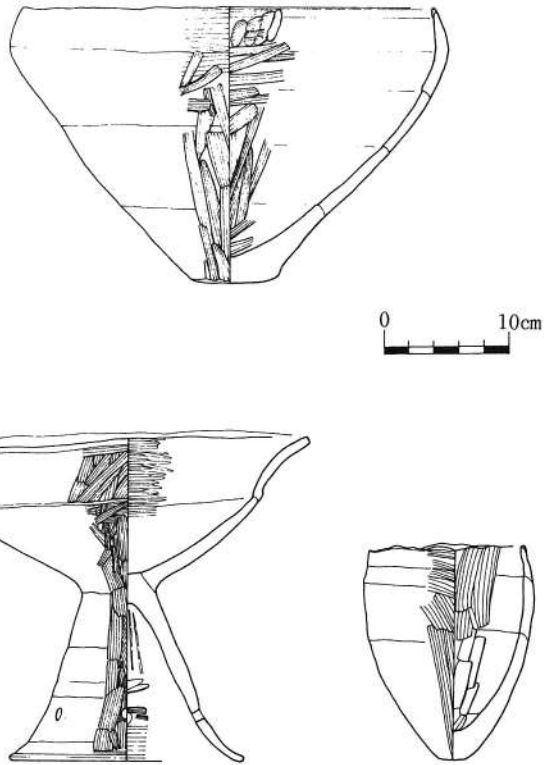


図25　出土土器実測図（ＳＫ―02）

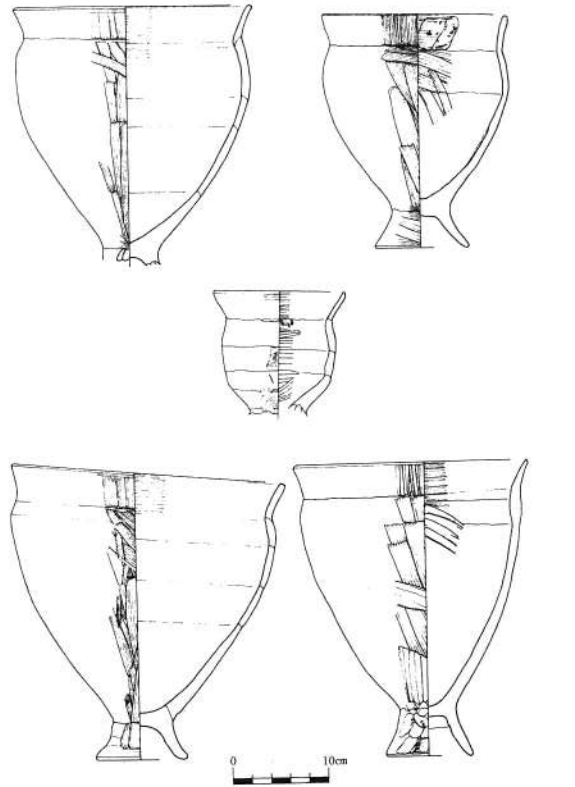


図26　出土土器実測図（上、左下）・Ⅴ層出土土器実測図（右下）

6　鍛冶屋馬場遺跡

鍛冶屋馬場遺跡は、国分市中央一丁目の市道犬追馬場線に位置する。遺跡地は、国分市街地の北側に位置し、後背地に姶良カルデラ壁の独立丘陵状の上の岡、愛宕山、城山を控え、南側は鹿児島湾に面した沖積平野へと広がる標高一二㍍から一三㍍の微高地上にある。とくに、本遺跡は大隅国分寺の推定寺域内にあり、国指定史跡となっている所からは、わずか一二〇㍍しか離れていない。

また、本地域は江戸時代初めに舞鶴城を築城した際、舞鶴城に合わせて区割りを敷いたため、それまでの大隅国分寺や大隅国府を基調とした街並みから一変している。このため、江戸時代以前の街並み、すなわち大隅国分寺域を分かりにくくしている。反面、現在の街並みと違う方向の（東西南北に走る）遺構等を検出できれば、それが大隅国分寺の検出に繋がる有効な手がかりとなってくる。

昭和六十一年（一九八六）、国分市は都市計画事業として街路の改良工事を計画した。その一路線が犬追馬場線で、市街地の北側を東西に（延長八〇〇㍍、幅五㍍）走る市道である。国分市が事業の執行にあたり、当該地域の埋蔵文化財の有無を国分市教育委員会に問い合わせを行った。その結果、当地が大隅国分寺跡に非常に近く、又周辺から国分寺のものと思われる古瓦や須恵器、土師器等が散布していることから、工事施工前に埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

調査は、国分市教育委員会が主体となり、鹿児島県教育庁文化課の協力を得ながら第一次調査（確認調査）を昭和六十一年十月から十一月にかけて、第二次調査（本調査）を六十二年八月から十一月にかけて実施した。

調査の結果、本遺跡は縄文時代後期、奈良・平安時代、江戸時代の三つの時代の遺跡が複合していることが分かった。縄文時代の遺物は、第一次調査時の第十四トレンチ（国分市立図書館北側）の比較的安定状態の地層（第Ⅷ）から出土した。遺物としては、土器片がほとんどで出水式土器、岩崎上層式土器、市来式土器、特殊土器等が出土した。出土した遺物については、ややローディングを受けている感はあるが、出土状態、層序等は安定しており、近辺に縄文時代後期を中心とする遺跡が埋蔵されている可能性がでてきた。

奈良・平安時代の遺構は、それぞれ東西に走る溝状遺構が三基、土壙が一基検出された。溝は国分寺の築地壁に伴う外濠と思われる大規模（幅五・六㍍、深さ二・〇㍍）なものと、それぞれ築地壁に伴う内濠（幅〇・八㍍、深さ〇・九㍍）、雨落溝（幅〇・四㍍、深さ〇・二五㍍）が検出された。土壙は溝状遺構に隣接するかたちで検出され、形状は摺鉢型を呈し、最大径六・二㍍、深さ一・一㍍を測る。いずれも、遺構中に多量の布目瓦が混在し、出土遺物から時代も同時期であることが分かった。遺物に関しては、布目瓦がほとんどで、土師器、須恵器等はほとんど出土しなかった。江戸時代の遺構としては、土壙三基、鍛冶炉六基が検出されている。

本遺跡での発掘調査の成果として、大隅国分寺の中心（伽藍地）を石造層塔として二町四方の規模と考えると、寺域の北限と今回検出した溝状遺構のとが大体において一致している。このことから、この遺構は大隅国分寺の築地塀に伴う外濠、内濠、雨落溝である可能性が高いが、今後の調査、研究によってより明確になると思われる。

鍛冶屋馬場遺跡で出土した布目瓦は、昭和五十六年九月鹿児島県教育庁文化課によって発掘調査された大隅国分寺跡（国分市立図書館駐車場）から出土した布目瓦を参考にしながら、次のように分類した。

（軒丸瓦）

一類　周縁は広く高い直立縁（内斜面）で粗文。外区は珠文を二本隆起線で囲んだ珠文帯。花弁は六葉複弁で間弁をもつ。中房蓮子は平形で一＋四＋八である。特徴としてキズが瓦当面に残る。

二類　周縁はやや広く高い直立縁で粗文。外区は珠文を二本隆起線で囲んだ珠文帯。花弁は八葉複弁で間弁はもたない。中房蓮子は圏縁付平形で一＋八である。

三a類　周縁は直立縁で粗文。外区は珠文はなく二本の隆起線からなる。花弁は十一葉単弁で間弁はもたない。中房蓮子は圏縁付平形で一＋五である。

三b類　三a類に珠文をめぐらしているもの。

四類　周縁、外区は不明。花弁は八葉単弁で間弁をもつ。中房蓮子は平形で一＋八である。

（軒平瓦）

一a類　周縁は素文帯。外区は上・下・側帯に珠文を

めぐらす。内区は扁行唐草文

一b類　周縁は素文帯。外区は上・下・側帯に間隔狭く珠文をめぐらす。内区は扁行唐草文

一c類　周縁はやや広い素文帯。外区は上・下・側帯に珠文をめぐらす。内区はやや文様の小さい扁行唐草文

一d類　周縁はやや広い素文帯。外区は上・下・側帯にやや大きめの珠文をめぐらす。内区は扁行唐草文

二類　「大隅国分寺跡確認調査事業報告」昭和五十六年から参照

周縁は素文帯。外区は上・下帯にやや大きめの珠文を施す。内区は一類と文様の異なった扁行唐草文

三類　周縁はやや広い素文帯。外区は上・下帯に珠文を施す。内区はやや間延びした扁行唐草文

四類　周縁は素文帯。珠文はなく、内区は彫刻扁行唐草文

【参考文献】

「鍛冶屋馬場遺跡・亀ノ里遺跡」　一九八九　国分市教育委員会
「大隅国分寺跡確認調査事業報告」　一九八一　国分市教育委員会
「日向国分寺址跡」　一九六三　宮崎県教育委員会
「九州古瓦図録」　一九八一　九州歴史資料館
「創立七十周年記念誌」　一九八四　県立国分高等学校創立七十周年記念誌編集委員会

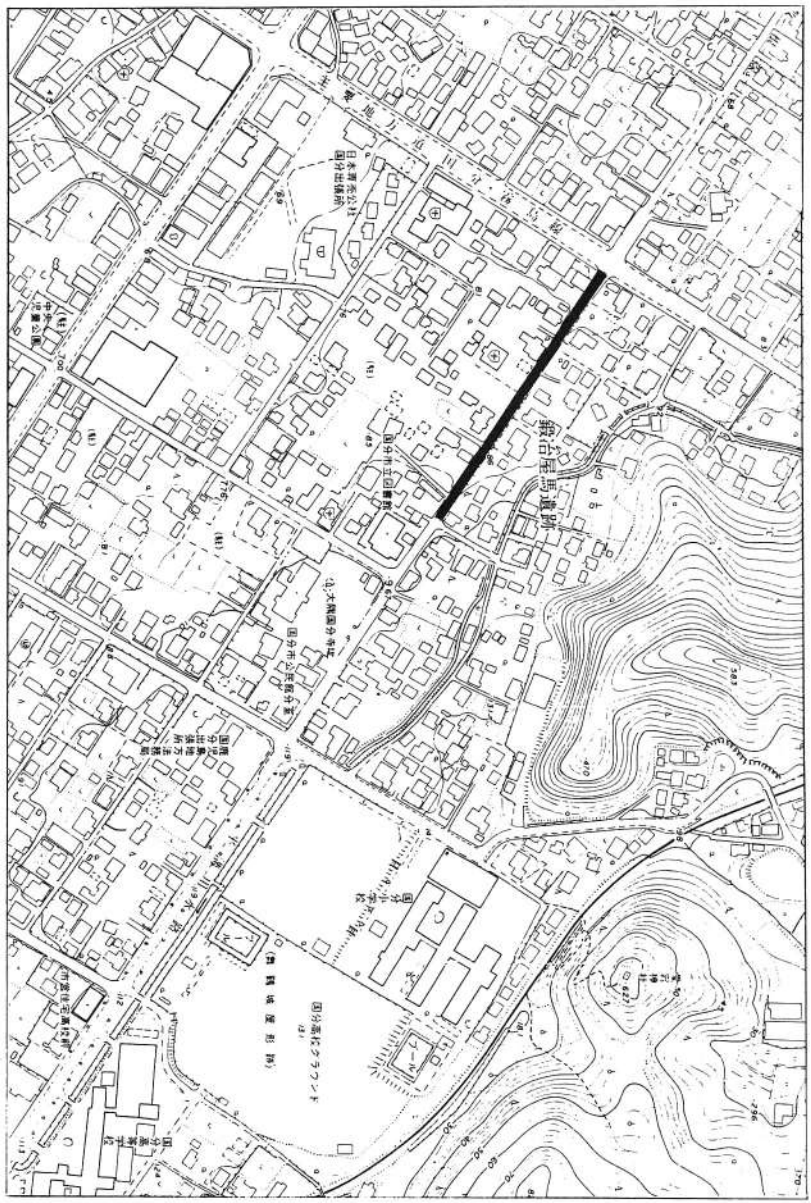


図27　鍛冶屋馬場遺跡周辺地形図

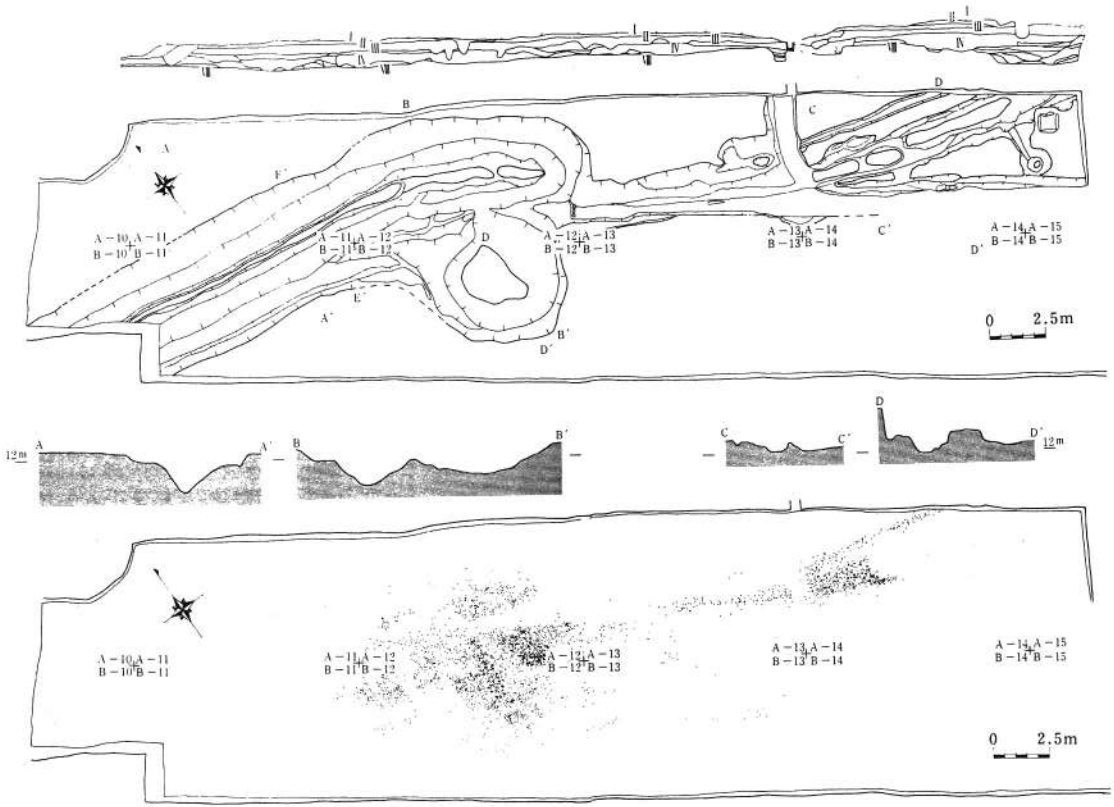


図28　遺構配置図及び遺物出土状況図

図29　縄文第IIａ～第IIｅ類土器

図30　溝１出土遺物実測図

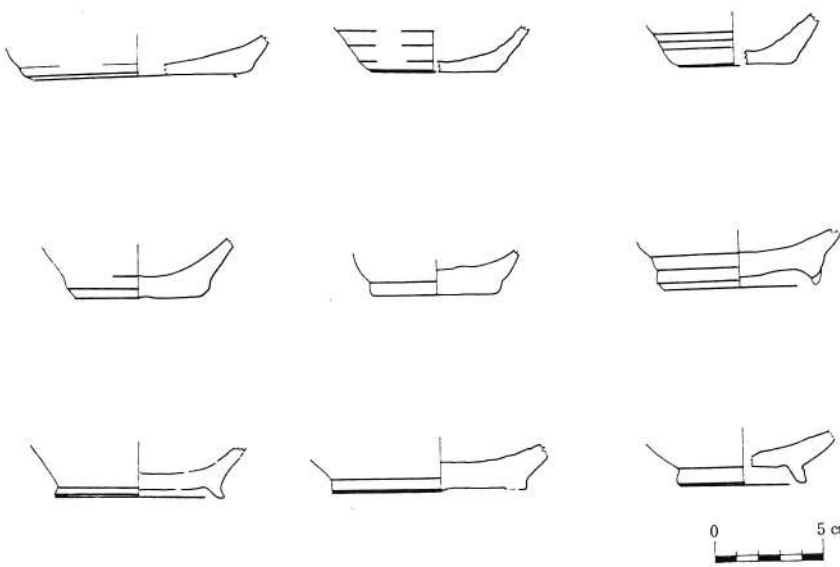


図31　溝１土壙１断面図

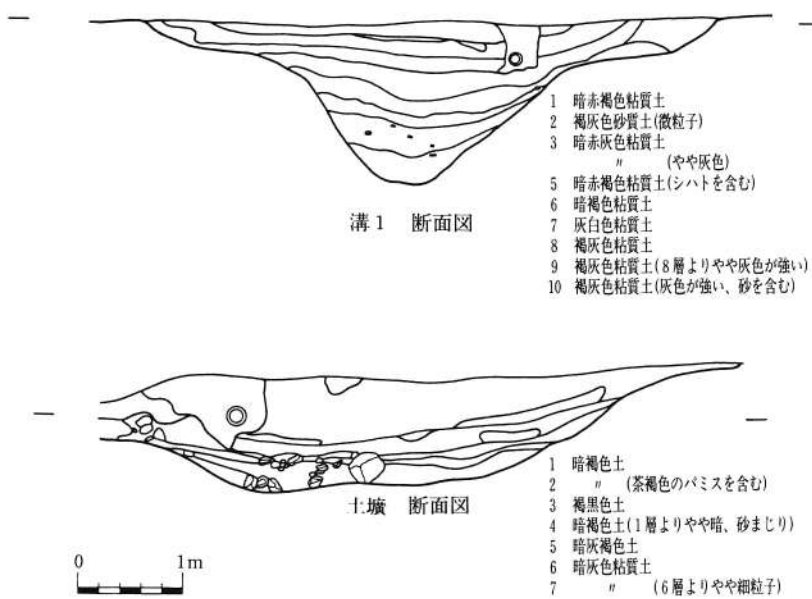


図32　溝１出土遺物実測図

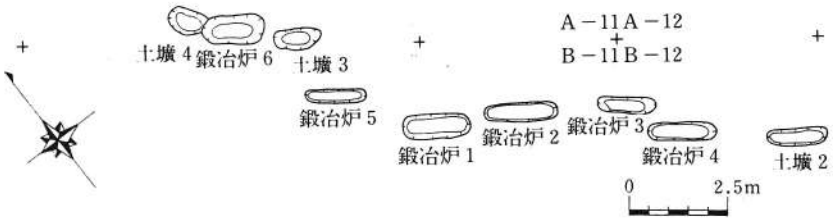
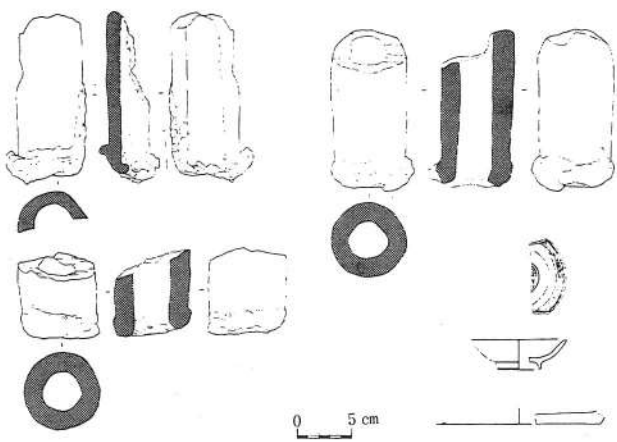


図33　土壙鍛冶炉配置図



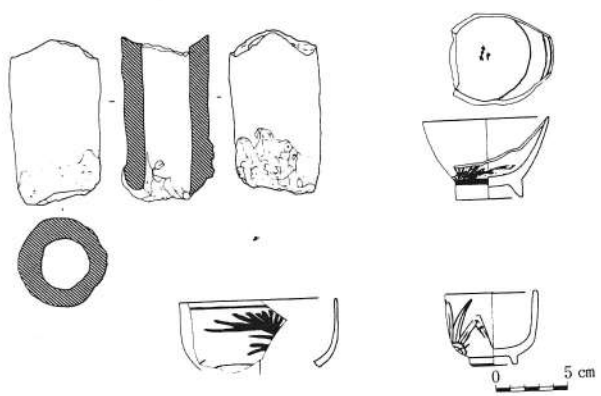


図34　鍛冶炉2出土遺物実測図　　鍛冶炉4出土遺物実測図

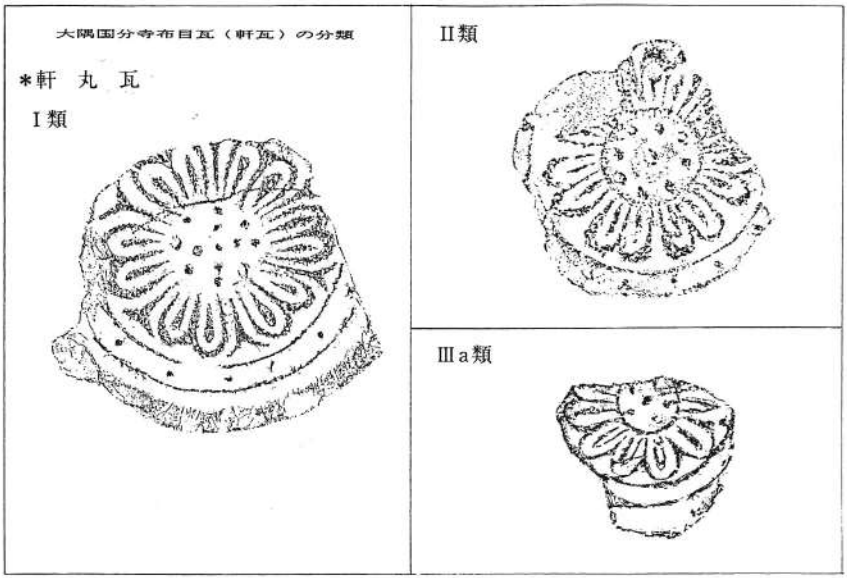


図35　大隅国分寺布目瓦分類　1

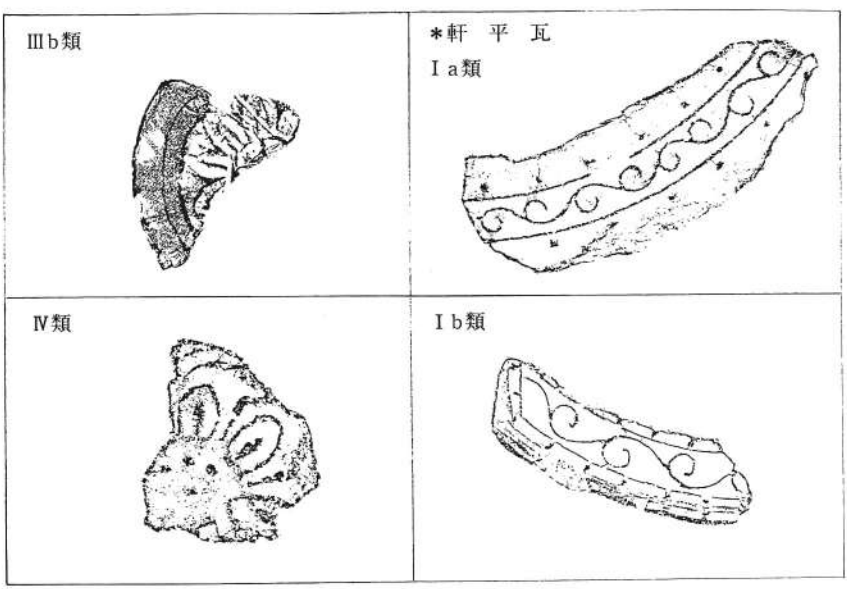


図36　大隅国分寺布目瓦分類　2

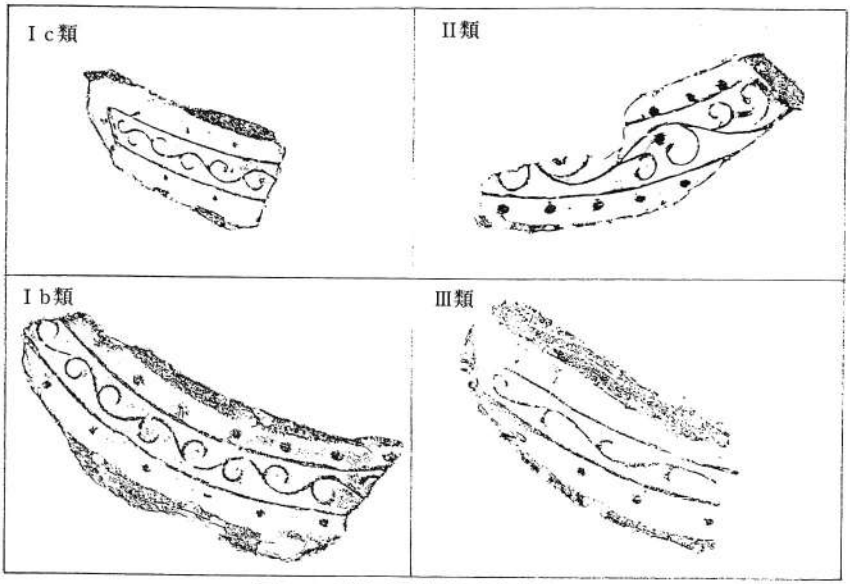


図37　大隅国分寺布目瓦分類　3

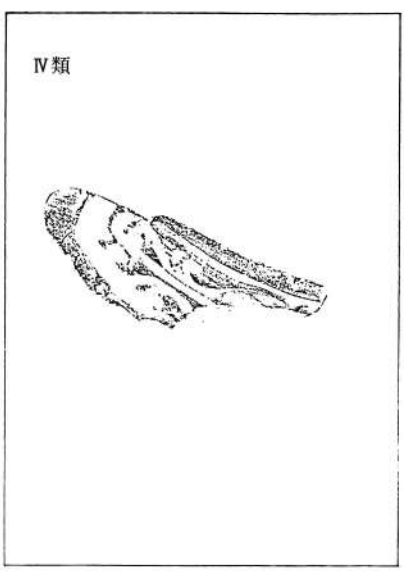
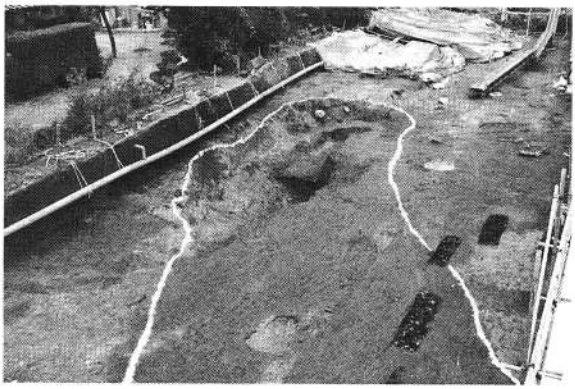
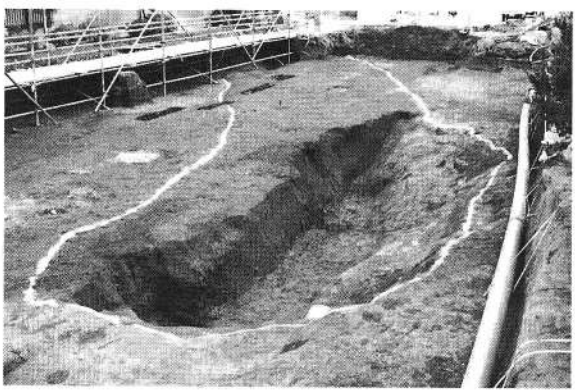
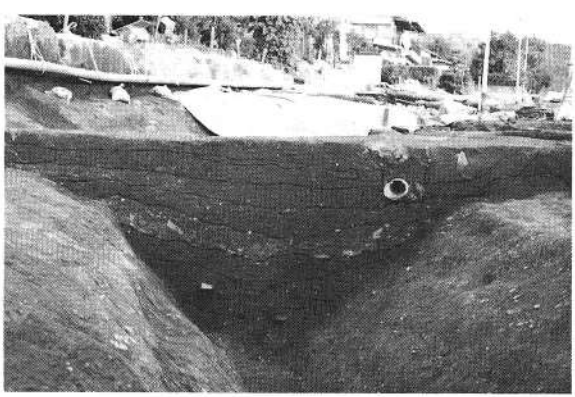


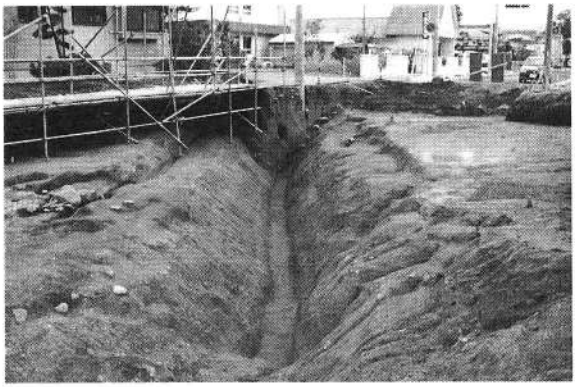
図38　大隅国分寺布目瓦分類　4

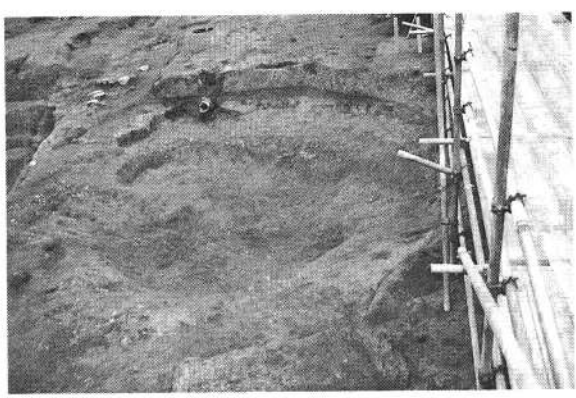




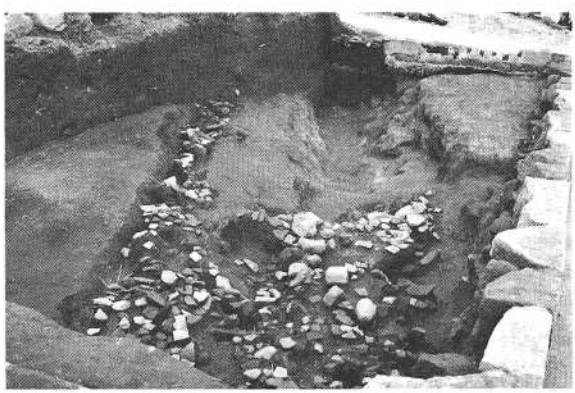


上　溝状遺構１検出状況（西より）
中　溝状遺構１検出状況（東より）
下　溝状遺構１土層断面

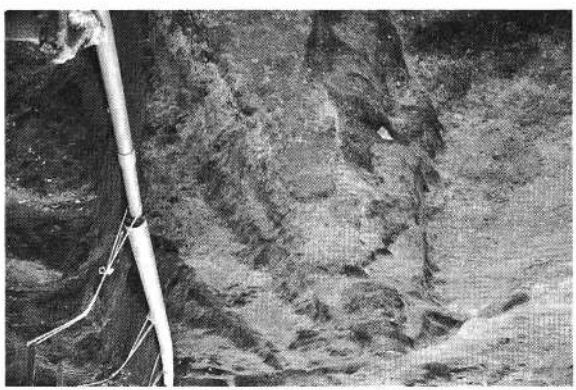


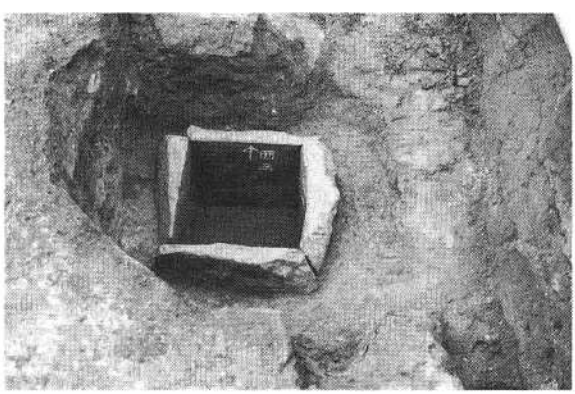


上　溝状遺構１完掘状況（東より）
中　溝状遺構完掘全景
下　土壙１完掘状況

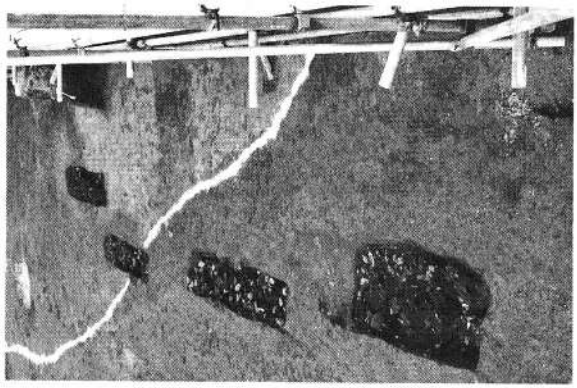


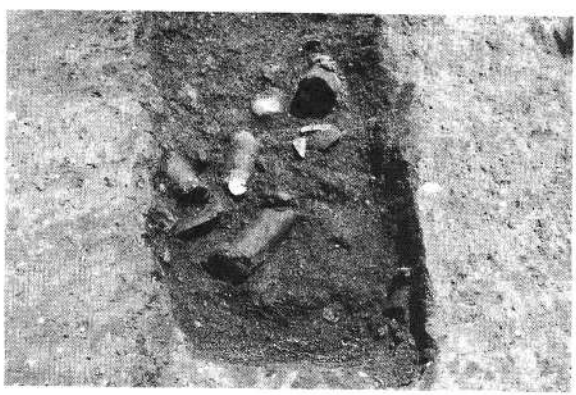
上　溝状遺構２、３出土状況（東より）
中　溝状遺構２　遺物出土状況
下　溝状遺構２、３出土状況（西より）

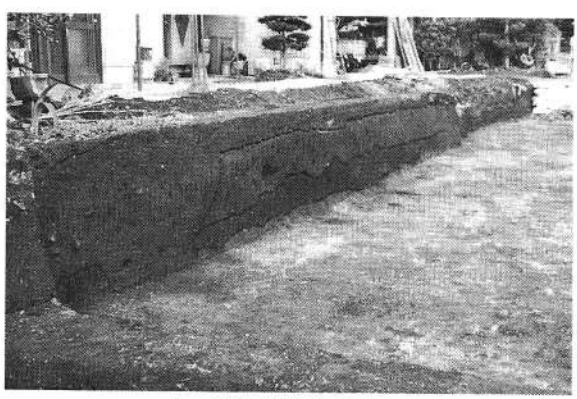




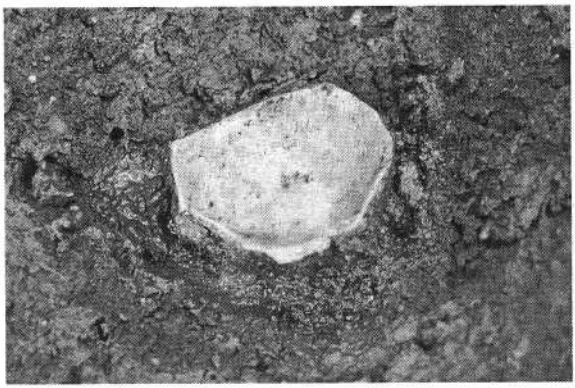
上　溝状遺構３　遺物出土状況
中　溝状遺構２、３完掘状況（東より）
下　井戸跡検出状況

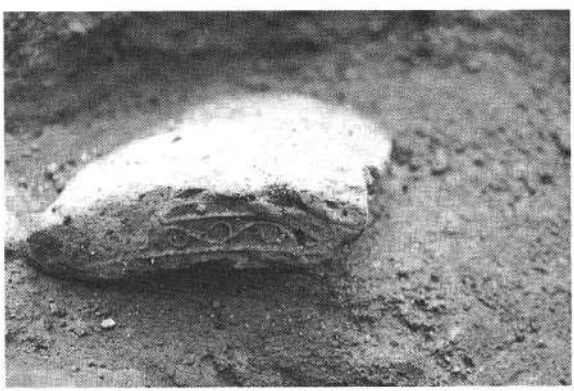




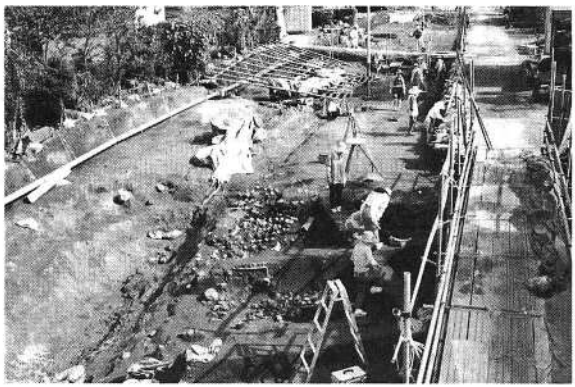


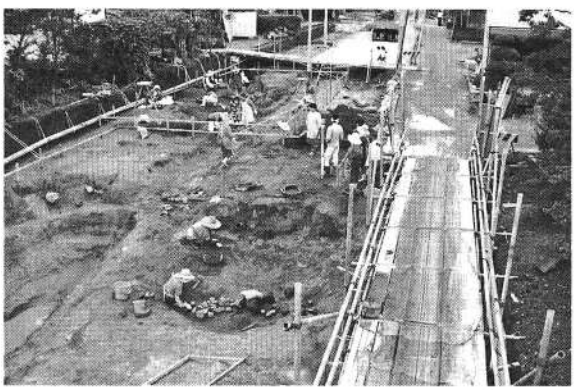
上　鍛冶炉検出状況
中　鍛冶炉遺物検出状況
下　土層断面





上　土師器出土状況
中　軒平瓦出土状況
下　溝状遺構１　発掘風景





上　土壙１発掘風景
中　土壙１溝状遺構２、３発掘風景
下　溝状遺構２、３発掘風景

7　国府（小路）遺跡

国府（小路）遺跡「以下、小路遺跡」は、国分市中央一丁目の県道参宮線に位置する。遺跡地は、国分市街地の北側に位置し、後背地に姶良カルデラ壁の独立丘陵状の鼻連山、愛宕山を控え、南側は鹿児島湾に面した沖積平野へと広がる標高一二㍍から一四㍍の微高地上にある。

とくに、本遺跡は大隅国分寺跡と大隅国府（推定地）との中間に位置し、地形からも河岸段丘で形成された台地上にあり、現在の街並みからも分かるように、古い時期から居住区として利用されてきた場所でもある。

本遺跡地は江戸時代初めに舞鶴城（隼人新城）を築城した際、舞鶴城に合わせて区割りを敷いたため、それまでの大隅国分寺や大隅国府を基調とした街並みから一変している。このため、江戸時代以前の街並みを分かりにくくしている。

昭和六十二年（一九八七）、加治木土木事務所は都市計画街路事業として街路の改良工事を計画した。その一路線が県道参宮線で、市街地の北側を東西に走る県道である。加治木土木事務所が事業の執行にあたり、当該地域の埋蔵文化財の有無を国分市教育委員会に問い合わせを行った。その結果、当地が大隅国分寺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地であり、周辺から布目瓦や土師器・須恵器片等が出土していることから、工事施工前に埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

調査は、国分市教育委員会が主体となり、鹿児島県教育庁文化課の協力を得ながら第一次調査（確認調査）を昭和六十三年三月、第二次調査（本調査）を同年八月から十二月にかけて実施した。

調査の結果、遺構については、東西又は南北に延びる溝状遺構が二〇基、土壙が二基、布目瓦の瓦溜まり一箇所が検出された。いずれも出土遺物（布目瓦、土師器・須恵器片等）から大隅国分寺跡や鍛冶屋馬場遺跡で検出した遺構とほぼ同時期であることがわかった。ただ、大隅国分寺の創建時がいまだ不明であることや、土師器・須恵器片の出土例が少ないことから、時期の特定についてまでは至らなかった。

溝状遺構の性格については、既設道路部分がすでに削平されていたことや、検出面が道路拡張部分のわずかな範囲でしかなかったことから、明らかにすることはでき

なかった。出土遺物について、とくに多量に出土した布目瓦（軒丸瓦や軒平瓦）は鍛冶屋馬場遺跡で出土した瓦と同類のものであることから、ほぼ同時期のものであると見てよい。

土師器・須恵器片等については、今後の調査の指標となるべく、形態と法量の面から試みようとしたが、出土例が少なかったため、編年の製作までには至らなかった。遺物は、この外に江戸時代の遺構から青磁、染め付け、瓦器、桟瓦の出土をみた。

本遺跡での発掘調査の成果として、大隅国分寺跡と大隅国府（推定地）のほぼ中間地点にこのような遺構・遺物が検出されたことはたいへん興味深いことである。とくに一類の軒丸瓦（瓦当にキズがあることから同じ型枠で作製された）が瓦溜まりや溝状遺構から出土していることから、これらの遺構と大隅国分寺（国分市立図書館駐車場）や鍛冶屋馬場遺跡の遺構とが同時期のものであったことが分かる。

当時、瓦を葺いていた建築物というと、ある程度限られてくる。例えば、官舎や尼寺の可能性も否定できない。今後の調査、研究によってより明確になると思われる。

【参考文献】

「鍛冶屋馬場遺跡・亀ノ里遺跡」　一九八九　国分市教育委員会
「国府（小路）遺跡」　一九九〇　国分市教育委員会
「大隅国分寺跡確認調査事業報告」　一九八一　国分市教育委員会
「日向国分寺址跡」　一九六三　宮崎県教育委員会

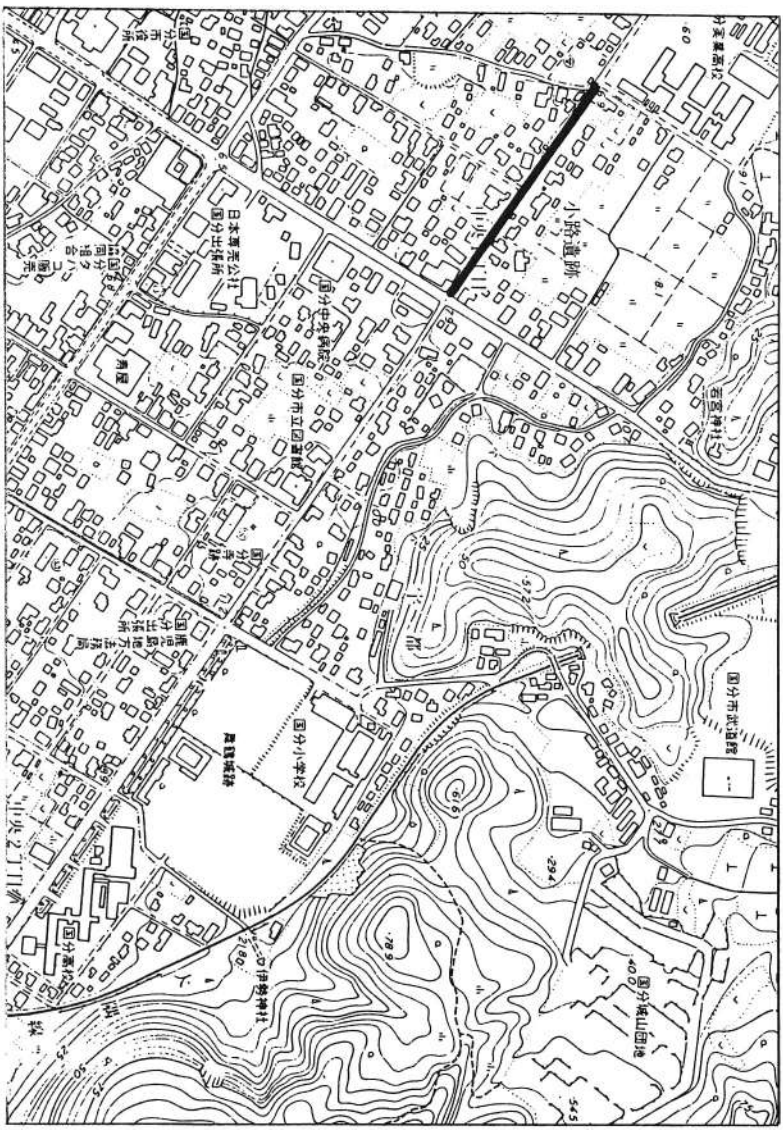


図39　小路遺跡周辺地形図

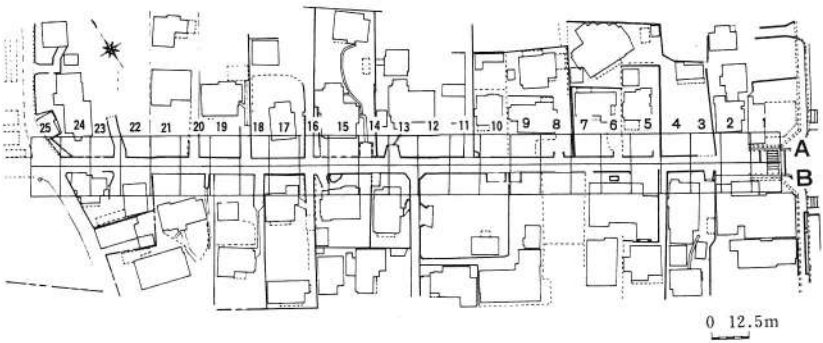
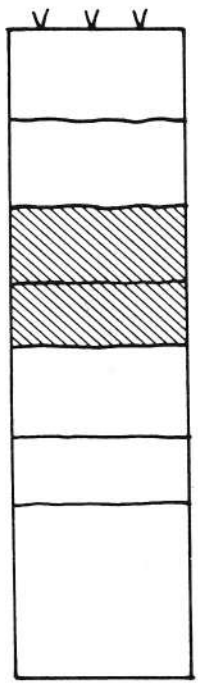


図40　小路遺跡グリッド配置図



Ⅰ　層　暗褐色の表土層である。

Ⅱ　層　暗褐色の盛土層である。軽石，小石，パミス等を含む。

Ⅲａ層　暗褐色土で，軽石，小石を含む。奈良・平安時代の遺物包含層である。

Ⅲｂ層　暗褐色土で，粒子はⅢａ層より細かく，粘性を帯びている。奈良・平安時代の遺物包含層である。

Ⅳ　層　茶褐色土で，粒子は細かく粘性を帯びている。鉄・マンガンが層底部に含まれている。

Ⅴ　層　白灰色のシルト層で，粒子は細かく粘性は強い。シラスの二次堆積したものである。

Ⅵ　層　黄褐灰色砂層で，粒子はやや粗く，含水率は高い。沖積世堆積層で，遺物，遺構はまったくみられない。

図41　標準土層図

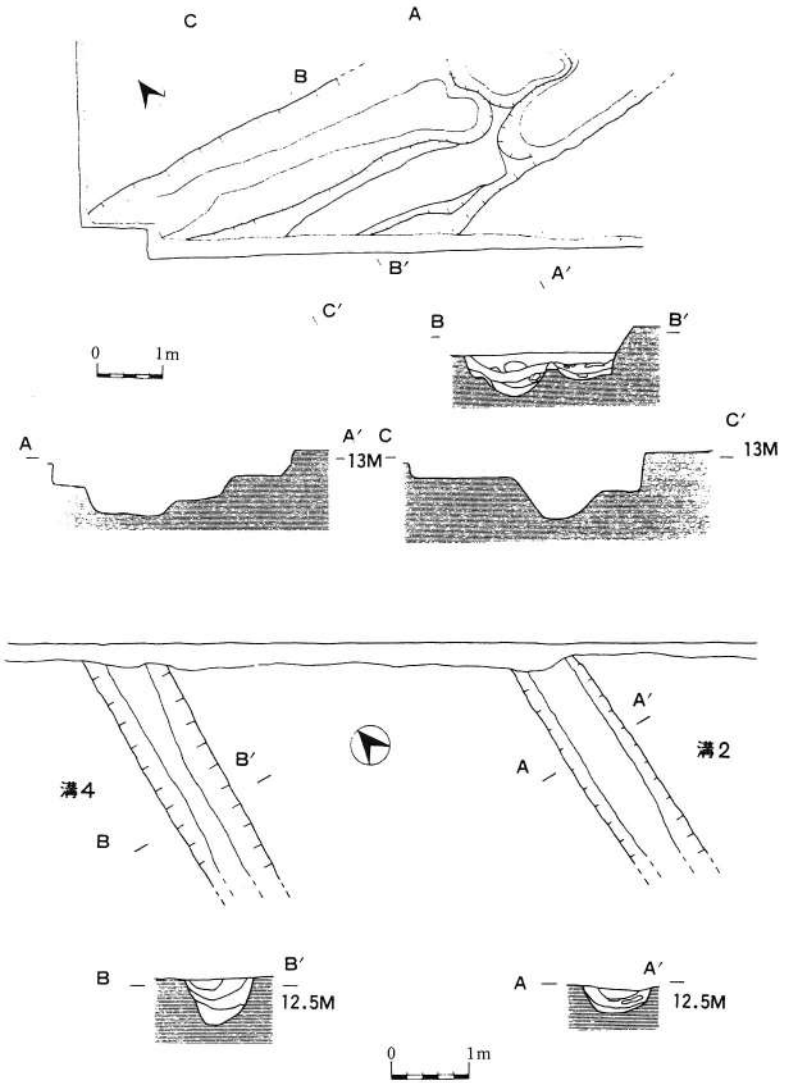


図42　上　溝状遺構1平面実測図　下　溝状遺構2、4平面実測図

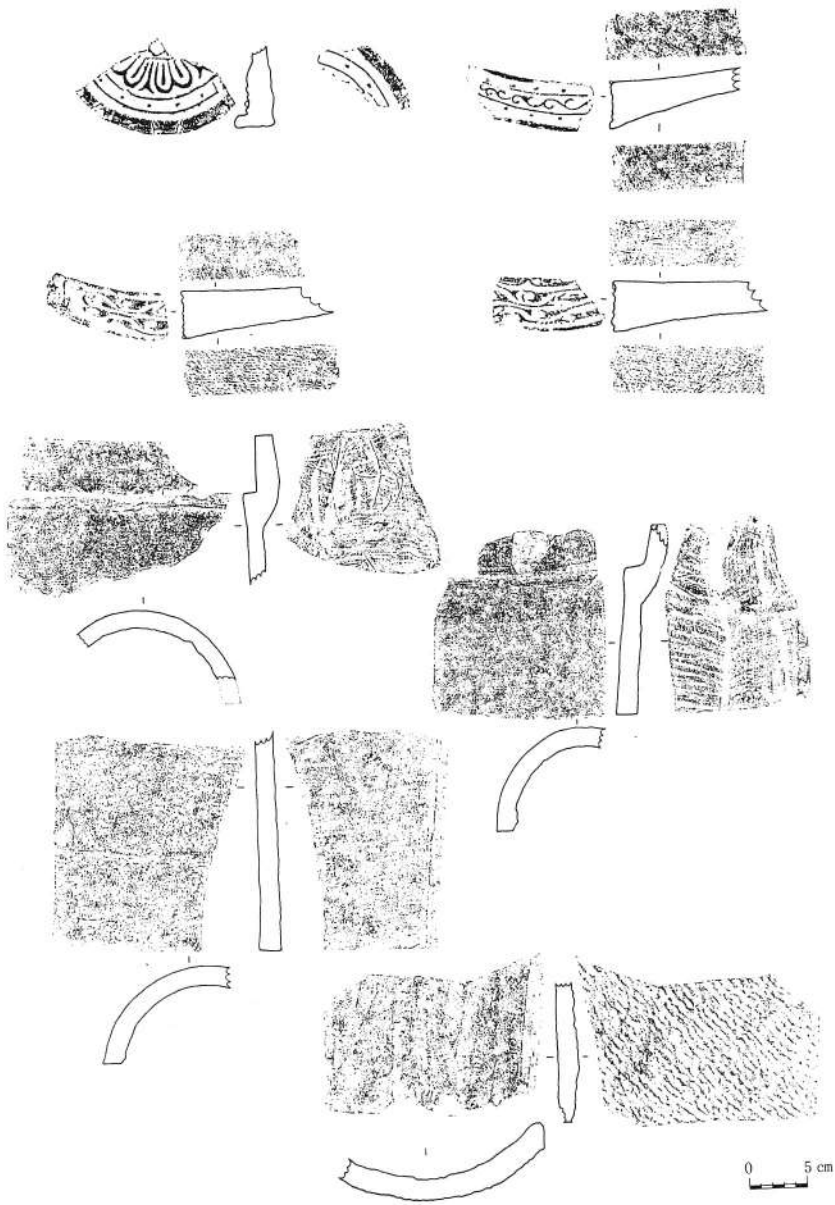


図43　瓦溜り出土遺物実測図(1)

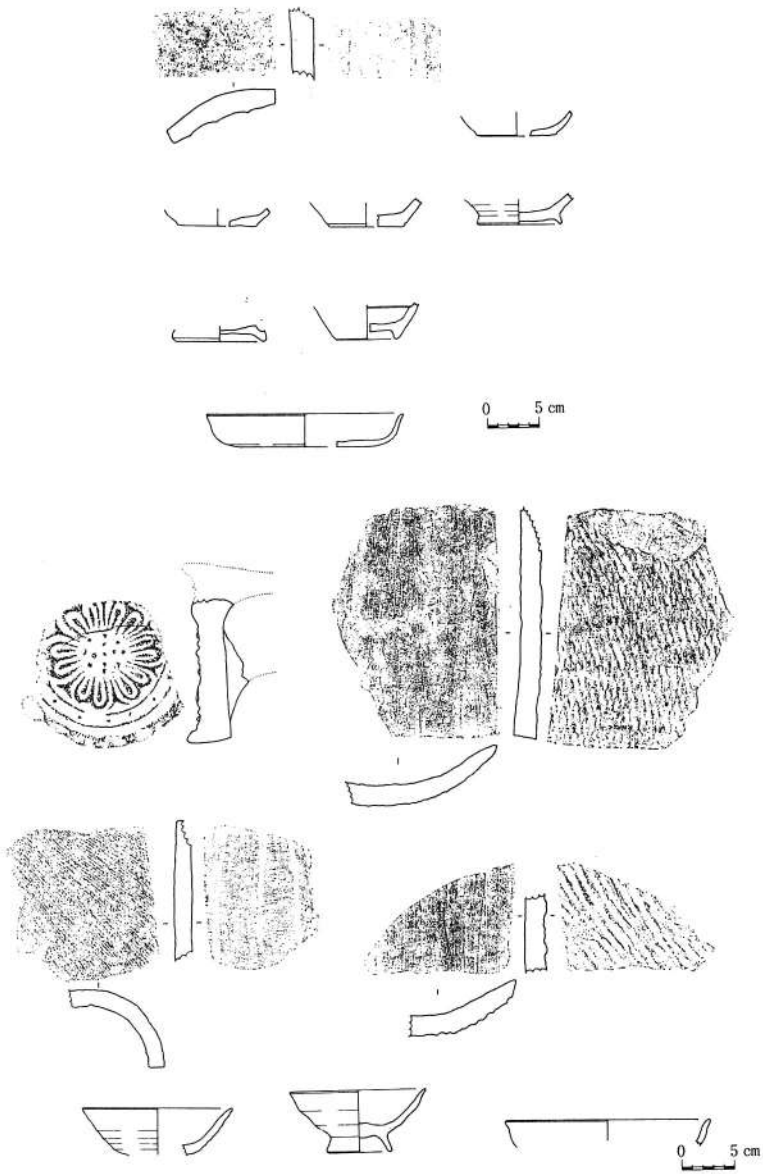


図44　瓦溜り出土遺物実測図(3)　土壙1出土遺物実測図

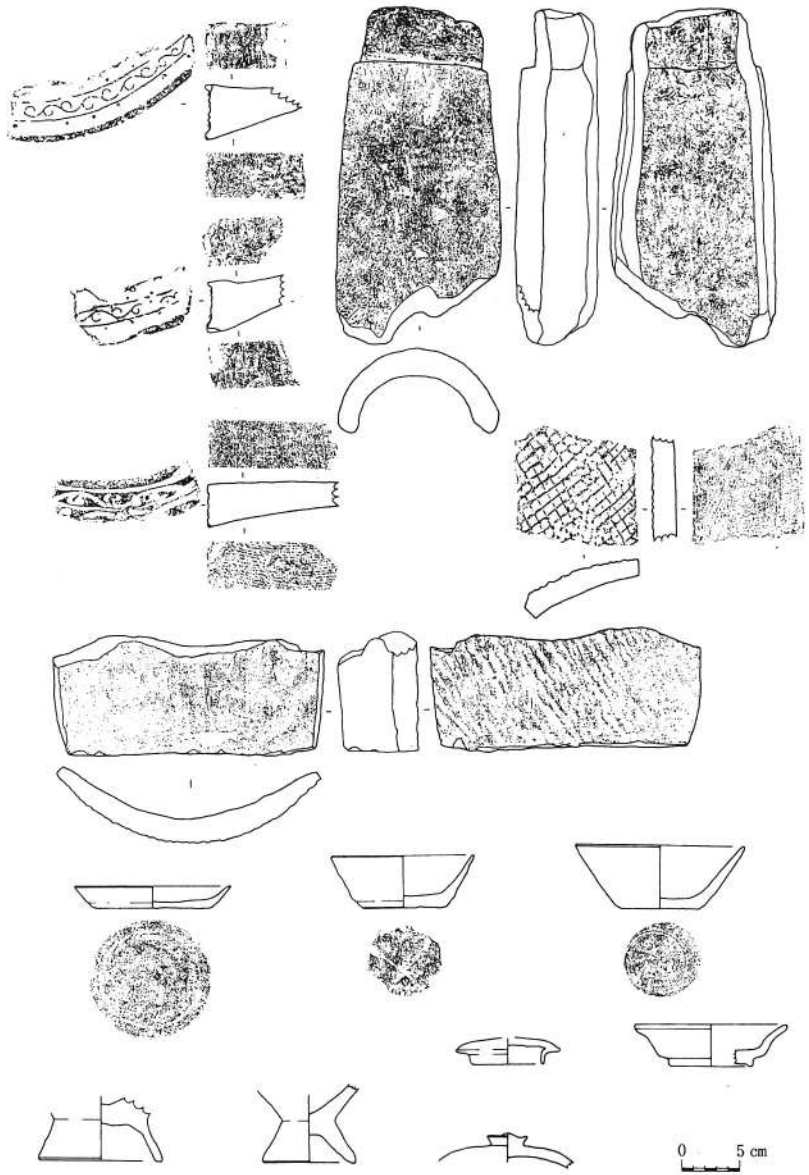
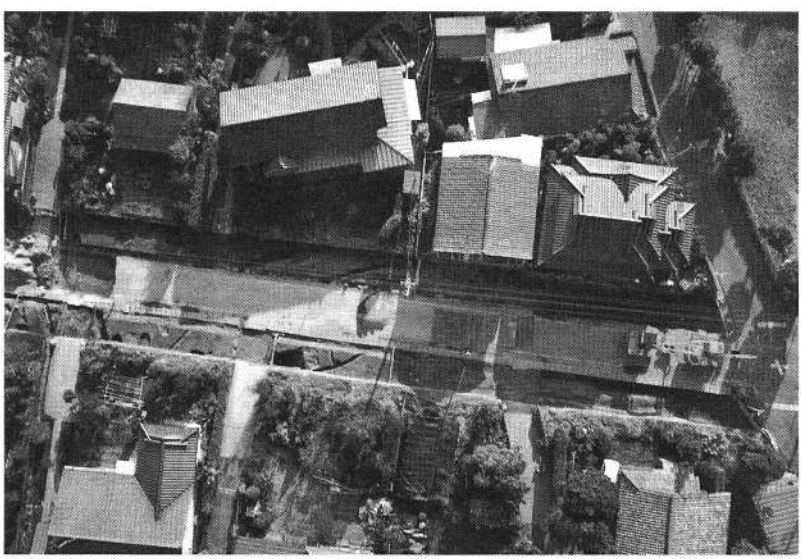
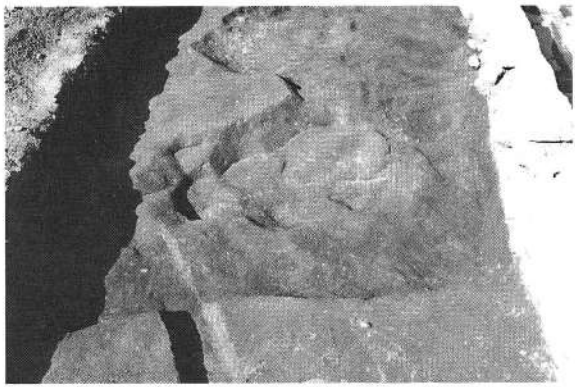
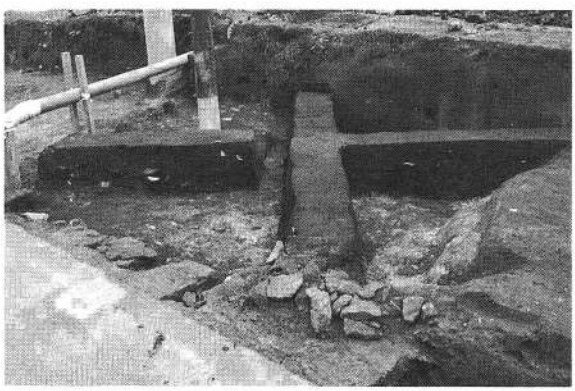


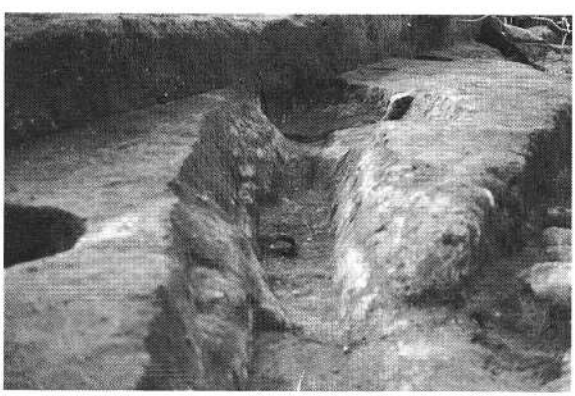
図45　その他出土遺物実測図



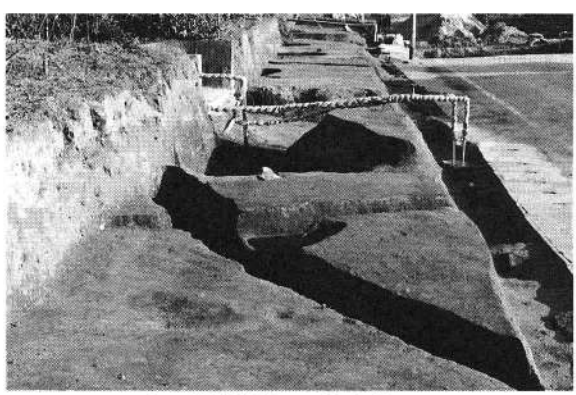
上　発掘調査全景
下　発掘調査A・B—20～25区



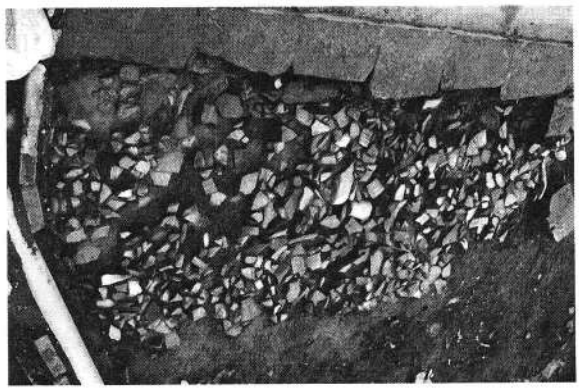


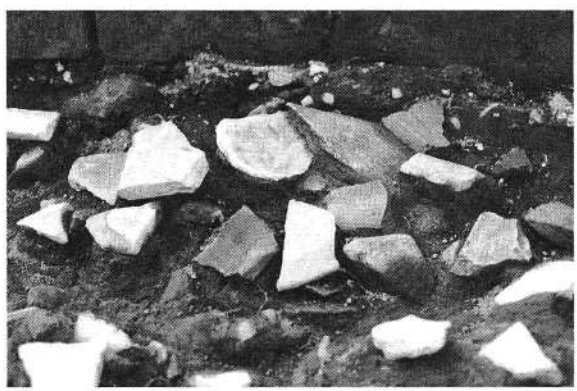


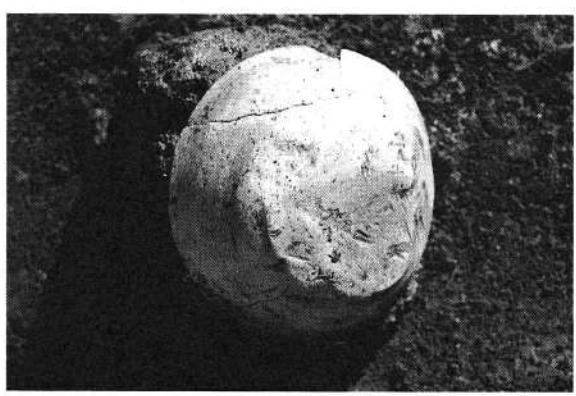
上　土壙５、６検出状況
中　瓦溜り検出状況
下　溝状遺構１　検出状況



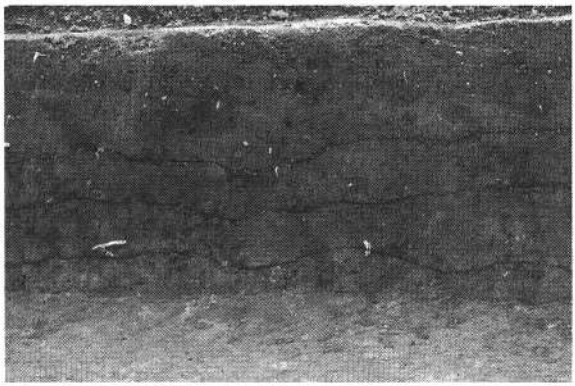
上　溝状遺構14　検出状況
中　溝状遺構14　土層断面
下　溝状遺構17、18検出状況

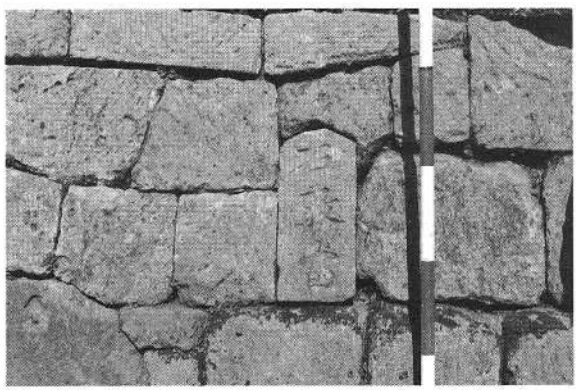




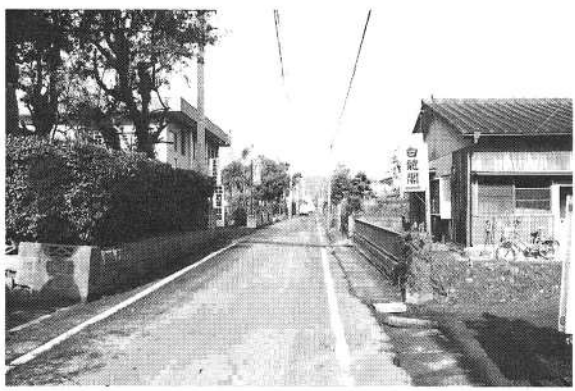


上中　瓦溜り遺物出土状況
下　　瓦溜り土師器出土状況





上　土層断面
中　石敷当
下　発掘調査風景



上　発掘調査風景
中　発掘調査前
下　発掘調査後